

マームーンとムウタスィムの新軍団

余 部 福 三

【要約】 バグダードでアッバース朝の中央政府軍となったホラーサーンの革命軍は東方の王侯土豪の勢力をそぐことに熱心で、カリフの中央集権化政策を支持した。これに対し、東方の王侯土豪はしばしば反乱をおこし、イスラームを乗教して独立を目指したり、カリフに政策を変更してかれらの自治権を認めるように要求したりした。かれらはマームーンを支持して中央政府軍に支持されたアミーンを打倒し、ホラーサーン自治を確かなものにしただけでなく、一時は帝国を支配する体制さえ構想した。かれらの一部はマームーン、ついでムウタスィムの招きに応じて、兵を率いてバグダード、ついでサーマッラーに移り、中央政府軍に入った。イスラームが浸透しつつあるソグド以遠の辺境の諸地域から、定着民や遊牧民が土豪、貴族に率いられてサーマッラーに移って来た。かれらがトルコ人やフェルガーナ人とよばれる人々であり、奴隸ではない。

史料 六六卷六号 一九八三年一月

はじめに

アッバース朝の軍隊については豊富な記述史料の存在にもかかわらず、これまで体系的に研究されることはなかった。ただ、史料が豊富といっても、軍隊の組織や指揮官、兵士の出身、募集の方法等について体系的に記述したものはない。しかし、史書等には戦争、反乱、クーデター、宮廷の政争（単なるカリフ一族の内紛ではなく、大軍が駐留しているバグダード、ホラーサーン、シリア、イフリーキーヤのそれぞれに支持基盤をもった地域的対立である場合が多い。）等によって、きわめて多数の指揮官の名が登場する。この個々の指揮官の出身地、出身部族、血縁関係をさぐっていくことによって、かなり鮮明にアッバース朝の軍の実像が浮びあがってくる。この方法はすでにケネディ^①がきわめて簡単ながら試み

ているが、実際これ以外には方法がないと思われる。軍隊に限らず、広く初期イスラーム史の研究は役所の公文書や私的な書簡が散逸した今、年代記を熟読し、登場する個人個人の出身地、属する階層、人間関係等に注目し、当時は常識であった（あるいは故意に記述しなかった）明記されていない重要な事実を行間に読みとることが必要である。以下に人名と地名がきわめて多数登場するのは史料のこういう性格のためである。

また、初期イスラーム史の研究はいまだ播鑑期にあり、あやまった俗説がまかり通り、学界でも通説化しているのが現状である。読者は本稿の論を奇異に感じられるかも知れないが、冷静に判断していただければ幸いである。

① H. Kennedy, *The early 'Abbasid caliphate*, 1981, London, pp. 79-86.

一 初期アッバース朝の軍隊

成立後のアッバース朝政府軍の主力はもちろんホラーサーンでおきた革命軍である。別稿で詳しく論じたように、この軍は革命の現地での指導者である二人のナキーブ naqīb や二人または二人のナズィール nazīr、七〇人または五人のダーイー dā'ī 三十六人の下級ダーイー dā'ī al-du'āt が自分で兵を集めて指揮した多くの部隊の連合体である。兵士はアラブとマワリー māwalī の混成軍だが、指導者層はアラブの方が多く、さらに、最有力の指導者はほとんどアラブであった。部族はフザア Khuzā'a 族が中心で、タイイ Tayy 族、タミーム Tamīm 族の特定の氏族がこれにいていた。アラブは指導者も兵士も革命時ホラーサーンのディーワーン diwān に登録されていた正規兵であり、マワリーは大半が農民で、正規兵は一部に過ぎなかったと思われる。革命は州都マルウ Marw だけでなく、アビーワルド Abiward、ナサ Nasā、マルワールズ Marwarūdh、ヘラート Herāt、タリカーン Talqān、アームル Āmul、ザム Zam、ハラズム Khwarizm すべて同時にあった。

クーファ本部から派遣されてきた現地の革命の最高指導者アブー・ムスリム Abū Muslim はマルウ占領後、ナキーブ

の一人、タイイ族のカフタバ Qahitaba b. Shabib の指揮下にウマイヤ朝征討の遠征軍を派遣した。この遠征軍はその指揮官層の顔ぶれからみて、マルウの兵のほか、アビーワルド、ナサ、マルワールズ、それにグルガン Guḡan の兵が多かったことはまちがいない。この軍がウマイヤ朝を滅し、イラクにとどまり、のち新都バグダードにカティーフ qatīfā を与えられて、アッバース朝の正規軍となった。しかし、うちなりの部分がホラーサーンに帰郷したり、逆にホラーサーンにとどまった革命軍がおくれてイラクに移ってきたりした。表1はカフタバ遠征軍に加わった主要な指揮官とあとから自分の部隊を率いてイラクに移った指揮官の一覧表である。ここに登場する指揮官が率いた部隊は前述したようにかれら自身で集めた兵で、ほとんどマワリーを含めて自分と同じ部族民である。また、かれらの子孫も有力な指揮官であることから、部隊の指揮権が世襲されたことは間違いない。

ここでイスラーム史の研究者には常識的だが、表の注釈として革命軍の足どりを概観しておこう。

カフタバはイスファハーンを占領し、一三二年ラジャブ Rajab 一三日(七四九年三月一八日)ジャープラク Jablaq でアーミル 'Amir b. Dubāra 指揮下のウマイヤ朝のシリアの大軍を破ったあと、ニハーワンド Nihawand に籠城したウマイヤ朝軍を降伏させ、イラクに向った。^② かれはアブー・アウン Abū 'awn 'Abd al-Malik b. Yazid (表1の9) を指揮官として多くの部隊をシャフラズール Shahrāzur に送り、ウマイヤ朝最後のカリフ、マルワーン Marwān 二世の軍のイラク進出を牽制し、^③ 自らは大半の革命軍を率いてイラクに入り、クーフア北方のファッルージュ Fālūja でエフラテス川を西から東に渡ろうとして、イラクのウマイヤ朝軍と戦った。かれはこのとき戦死したらしいが、子ハサン Ḥasan がただちに司令官として認められてウマイヤ朝軍を破り、すでに革命がおきていたクーフアに入城した。^④ ここにクーフアの革命本部最高指導者アブー・サラマ Abū Salama を首班とする「臨時革命政府」が樹立され、まもなく、かれがクーフアに隠していたアッバース家のアブル・アッバース Abū'l-Abbās が革命将兵によって発見され、一三二年ラビー・Rabī' I 一四日(七四九年一〇月三日)カリフとして、かれらとクーフア市民の忠誠の誓いを受けた。^⑤

表1 カフタバ遠征軍の主な指揮官

氏名	所属部族	民族	地位	活動地域	革命最後の経歴	就いた役職	総督になった州
1 Qaḥṭaba b. Shabīb	Ṭayy'	A	naqīb	Marw	K (戦死)	ṣā'ifa	
2 Ḥasan b. Qaḥṭaba (前者の子)	Ṭayy'	A	naẓīr	Marw	K→W→AM		
3 Ḥunmayd b. Qaḥṭaba (前者の兄弟)	Ṭayy'	A	naẓīr	Marw	K→M→Abd (AM)	Khazar	Jazīra, Khurāsān
4 Mūsā b. Ka'b	Tamīm	A	naqīb	Marw	K→Abd	shurṭa	Sind, Egypt, Jazīra
5 'Uyayna b. Mūsā (前者の子)	Tamīm	A	dā'i	Marw	K→Abd	shurṭa	Sind (反乱)
6 al-Muṣayyab b. Zubayr	Ḍabba	A	naẓīr	Marw	K→D	shurṭa	Khurāsān
7 'Amr b. Zubayr (前者の兄弟)	Ḍabba	A		Marw			Kūfa
8 Khāzīm b. Khuzayma	Tamīm	A	naẓīr	Marwarrūdh	K→W→AM	chief general	
9 Abū 'awn 'Abd al-Malik b. Yazīd	Azd	A	naẓīr	Gurgān	Sh→Abd→掃部		Egypt, Khurāsān
10 Khālīd b. Barmak	Azd?	m	naẓīr	Gurgān	K→D	kharāj	Mosul, Ṭabaristān
11 Muḥammad b. Ṣul		m	dā'i	Gurgān	?→Abd		Azerbaijan
12 'Āmir b. Ismā'il	Ḥārith	A		Gurgān	K→Abd		
13 Khaffāf b. Maṣūr				Marwarrūdh	K→W→Abd		
14 al-Aḡḥlab b. Salīm			dā'i	Nasā		ṣā'ifa	Tubna
15 Usayd b. 'Abdillāh	Khuẓā'a	A	naẓīr	Nasā			Basra
16 Muqātil b. Ḥakīm	'Akk	A	naẓīr	Nasā	K→W→AM (戦死)		
17 Ghaylān b. 'Abdillāh	Khuẓā'a	A	dā'i	Nasā	K	ḥaraṣ	
18 'Uthman b. Nahik	'Akk	A	naẓīr	Abiward	K→W	ḥaraṣ	
19 Ṭsā b. Nahik	'Akk	A	dā'i	Abiward	K	shurṭa	Khurāsān
20 Abū'l-'Abbās al-Faḍl b. Sulaymān	Ṭayy'	A	dā'i	Abiward	K→W	ḥaraṣ	Khurāsān (反乱)
21 'Abd al-Jabbār b. 'Abd al-Raḥmān	Azd	A	dā'i	Abiward	K	shurṭa	Mecca, Basra
22 Ḥaytham b. Mu'awīya	'Akk	A	dā'i	Abiward	K		
23 Zubayr b. Muḥammad	'Āmir		dā'i	Abiward	K		
24 Bassām b. Ibrāhīm	Layth	m		Abiward	K→Abd (反乱)		
25 'Abdullāh b. Bassām	Layth	m		Abiward	K	ḥājib	
26 'Abd al-Ḥamid b. Rub'i	Ṭayy'	A	dā'i	Ṭus?	K→Abd→掃部		

27	Ḥarb b. 'Abdillāh al-Rāwandi	Tamim	m	dā'i al-du'āt	Naysābūr?		Khazar	
28	Abū Khalid Yazid al-Aḥwal		m		Marwarriḥ	?→Abd (AM)	haras	
29	Turākhudāt		m			?→Abd→帰郷		
30	Jahwar b. Marrār	Tjī	A	dā'i al-du'āt	Marw	K→W→反乱		
31	Muhriḥ b. Ibrāhīm			dā'i	Marw			
32	Abū'l-Jahm b. 'Aḥya	Bahlā	m	naḥr	Marw?	K→処刑		
33	Asad b. al-Marzubān		m		Fāryāb	K		
34	Shabīb b. Wāj	Tamim?	m		Marwarriḥ		(haras)	

おくれでイラクに移り政府軍に入った指揮官

35	Malik b. al-Haytham	Khuzā'a	A	naqīb	Marw	Sijistān からイラク に移る		Mosul
36	Muḥammad b. al-Ash'ath	Khuzā'a	A	naqīb	Marw	Fārs からイラクに 移る	sā'ifa	Ifrīqiya, Egypt
37	'Alī b. Tsā b. Māhān	Khuzā'a	m	父が naḥr		Rayy で Mahdi に 従い、イラクに移る	haras	Khurāsān

民族の圖 Aはアラブ, mはペルサー。

革命直後の経歴 Kは Kūfa 北方のユーフラテス渡河の戦いに参加し, Kūfa 占領後 Abū'l-'Abbās に忠誠を誓ったこと, Wは Kūfa 占領後 Wāsiṭ 包圍に派遣されたこと, Mは同じく Madā'in 包圍に派遣されたこと, Dは同じく Dayr al-Qunā 占領に派遣されたこと, Sh は Qaṭība によって Shahrazūr に派遣されたこと, AM は Abū Muslim の軍に加わって 'Abdullāh b. 'Alī と戦ったこと, Abd は 'Abdullāh b. 'Alī の軍に編入されて, Zab 川でウマヤヤ朝を破り, シリアを占領し, Abū Muslim と戦ったこと, Abd (AM) は 'Abdullāh 側から Abū Muslim に寝返ったことを意味する。

敵いた役職の圖 shurfa と haras はそれぞれカリフの saḥīb al-shurfa, saḥīb al-haras, ḥajīb はカリフの ḥajīb, sā'ifa は夏のビザンティン遠征軍司令官を, Khazar は対 Khazar 戦争司令官を意味する。Khāzin b. Khuzayma は国内の反乱鎮圧軍の司令官であった。

新政府は革命軍とカーフマヤとハムラの兵をワースィト Wāsiṭ、マダーイン Madā'in、ダイルル＝シンナー Dayr al-Qunā、アンローズ Ahwāz などに派遣してイラク占領を完成させる一方、革命軍の中ばにあたる大軍をカリフの叔父アブ・ムッラー 'Abdullāh b. 'Alī の指揮下に置いて、イラクに進出したようにしたマルワーン二世を討つために派遣した。アブ・ムッラーはマルワーンをザンブ Zab 川で破り、かれを追ってジャズィーラ、シリアを占領し、援軍を率いてきた兄弟サ

ーリフ Salih をエジプトに派遣し、ここでマルワーンは部下に殺された（一三二年ズル＝ヒッジャ Dhul-Hijja [七五〇年八月]）。一方、アブル＝アッバースの異母兄マンスール Abu Ja'far al-Mansur はワースイト包囲軍の司令官とされ、マルワーンの死後これを落したあと、同じ軍を率いて、親ウマイヤ朝のアルメニア、ジャズィーラの兵がウカイル Uqayl 族のイスハーク Ishāq b. Muslim の指揮下に籠城していたスマイサート Sumaysāt を包囲し、陥落させた。^⑤

後継者に指名されていたマンスールとホラーサーンから来たアブー＝ムスリムが一二六（七五四）年メッカ巡礼中に、ズル＝ヒッジャ一三日（六月八日）アブル＝アッバースが死に、マンスールがイラクでカリフと認められた。^⑥しかし、革命軍の中ばと旧ウマイヤ朝のシリア軍を抑えていたアブドゥラーは東ローマ遠征途上で、自らのカリフ職継承権を主張し、シリア軍の熱心な支援を得た。これに対し、マンスールはイラクに残っていた革命軍をアブー＝ムスリムの指揮下においた。アブドゥラー側からアブー＝ムスリム側に寝返る革命軍の指揮官が続出し、戦いはホラーサーン革命軍対旧ウマイヤ朝シリア軍の戦いの形になった。アブー＝ムスリムは一三七年ジュマダー Jumādā II（七五四年一月）ニシブス Nisibin でアブドゥラーを破り、マンスールのカリフ職を確保させたが、まもなくマンスールに処刑された。^⑦

これは後述するように、アブー＝ムスリムがホラーサーン、中央アジアで王侯土豪や土着化したアラブの大地主の支持で、独立国に近いかれらの連合政権を築いていたからである。一方、イラクの革命軍の大半はカリフ権力を支持し、その専制化と中央集権化を助けることになり、これに不満なものがホラーサーンに帰郷したとみられる。

また、あとからイラクに移ってきて重要な政府軍指揮官になったものもいる。その一人ナキープのマールク Malik b. al-Haytham（表一の35）は、アブー＝ムスリムが現地の革命最高指導者としてマルウに派遣されてきたとき、いちはやぐかれに忠誠を誓い、革命軍組織時にはかれのシュルタ shurta（警察）の長官に任命された。^⑧マールクは自分の部隊を率いてスィジスターン Sijistan を平定したあと、そこからイラクに移ってワースイト包囲に参加し、^⑨アブドゥラーとの戦いにも加わった。しかし、アブー＝ムスリムの処刑までかれを支持したため、カリフの不興を買っていたが、一四一（七

五八)年ラーワンディヤー Rawandiya (カリフを神格化するホラーサーンの原住民で革命軍の中にいた) がクーファ近く of 臨時首都ハシミーヤ Hashimiya で蜂起したとき、カリフを救って以来、重用されるようになった。^⑩ ナキープのムハンマド Muhammad b. al-Ash'ath (表1の36) はアブー・ムスリムによってホラーサーンからファールス Fars に総督として派遣され、アブル・アッバースが派遣した総督と衝突したが、^⑪ まもなくカリフに恭順し、革命軍の大きな部分を指揮下においてイフリーキーヤ Ifriqiya を占領した。この遠征軍の多くは州都カイラワーン Qayrawān、トゥヌス (チュニス) Tunus、トゥブナ Tubna などに駐留したようだが、ムハンマド自身はイラクに帰った。のちのイフリーキーヤ総督アグラブ家の祖アグラブ Agh-lab b. Salīm b. 'Aqqāl (表1の14) は自分の部隊とともに辺境のザーブ Zab 地方 (アル

第2 革命軍に投降したウマイヤ朝軍の指揮官でアッバース朝に重用された主な指揮官

州	氏 名	所属部族	革 命 後 の 経 歴
Khurāsān	Mujashshar b. Muzāḥim	Sulaym	Marwarrūdh に駐留し、'Abd al-Jabbār の乱を討つ
	Haytham b. Shu'ba b. Ḥuhayr	Tamīm	Ustādh Sis の乱を討つ
	Layth b. Naṣr b. Sayyār	Kināna	Samarqand に居て al-Muqanna' の乱を討つ
Kūfa	Muḥammad b. Khālīd al-Qasrī	Bajila	Kūfa, Medina の総督
	Ṭalḥa b. Ishāq b. Muḥammad b. al-Ash'ath	Kinda	一族の Ishāq b. al-Ṣabbāḥ b. 'Imrān b. Ismā'il b. Muḥammad (哲学者 Kindī の父) が Kūfa 総督
Baṣra	Sufyān b. Mu'āwiya b. Yazīd b. al-Muhallab b. Abī Ṣufra	Azd	Baṣra 総督
	Salm b. Qutayba b. Muslim	Bāhila	Kūfa 総督
	Yazīd b. Ḥātim b. Qabiṣa b. al-Muhallab	Azd	Egypt, Ifriqiya の総督
	Rawḥ b. Ḥātim (前者の兄弟)	Azd	Sind, Kūfa, Baṣra, Ifriqiya の総督
	'Umar b. Ḥaṣṣ b. 'Uthmān b. Abī Ṣufra Hazārmard	Azd	Sind, Ifriqiya の総督
Jazīra	Ma'n b. Zā'ida	Shaybān	Yaman, Sijistān の総督
	Yazīd b. Usayd	Sulaym	Armenia 総督。ṣā'ifa 指揮官
	Zufar b. 'Āṣim	Hilāl	Jazīra, Medina の総督。ṣā'ifa 指揮官
	Ishāq b. Muslim	'Uqayl	
	Bakkār b. Muslim (前者の兄弟)	'Uqayl	Armenia 総督 ṣā'ifa 指揮官
Mosul	Hishām b. 'Amr	Taghlib	Sind 総督
Syria	Riyāḥ b. 'Uthmān	Murr	Medina 総督

ジェリア中央部)のトゥブナに駐留した。^⑩また、一五二年イフリーキーヤで反乱をおこしてマンスールのもとに連行されたハーシム Hashim b. al-Ishtākhanj とフブー＝ハーリド Abu Khalīd Yazīd (表1の28)もこの遠征軍に参加していた指揮官に違いはない。^⑪かれらが背いたのはこのような辺境に駐留させられたことへの不満からだろう。

アッバース朝は革命軍のほか、旧ウマイヤ朝の軍を大幅に採用した。表2はかれらアラブの主要な指揮官の一覧表である。

ホラーサーンでも残留した革命軍のほか、態度があいまいだったものや反革命軍の帰順したものがアッバース朝時代にも地方軍として残された。このことは、マルワッルースのスライム Sulaym 族の指導者ムジャッシヤル Mujāshshar b. Muzāhim が七五八年にアッバース朝に対して反乱をおこしたホラーサーン総督アブドゥル＝ジャッバール ‘Abd al-Jabbār b. ‘Abd al-Rahmān (表1の21)を捕え、サマルカンドのタシーム族の指導者ハイサム Haytham b. Shu‘ba b. Zuhayr が七六七年に反乱をおこしたウスターズ＝スィース Ustādh Sis と戦い、ウマイヤ朝最後のホラーサーン総督ナスル Nasr b. Sayyār の子ライス Layth、ムハンマドや孫ハッサン Hasan b. Tamīm がムカンナフ al-Muganna’ の反乱(七七六―七八〇)と戦っていることとわかる。^⑫

クーフアはウマイヤ朝時代イブン＝アシュナス Ibn al-Ash‘ath の乱(七〇〇―七〇二)の失敗後、アラブの非武装化が進んでいて、革命時にはアラブ正規兵はあまり多くなかった。ウマイヤ朝末期のクーフアとバスラの総督ハーリド Khalīd al-Qasrī の子ムハンマドとクーフア建設時のキンダ Kinda 族の指導者アシュナス Ash‘ath の曾孫タルハ Talha b. Ishāq b. Muhammad は革命軍が近づくとき、配下のアラブを率いて蜂起し、ウマイヤ朝のクーフア総督(Ziyād b. Salih)を追放し、革命軍を迎えた。^⑬かれらと寝返ったシリア軍はアッバース朝下でも正規兵としてどまったと思われる。バスラはアズド Azd 族の指導者ムハッラフ Muhallab b. Abī Sufra の曾孫ヌフヤーン Nufyān b. Mu‘āwiyā b. Yazīd が、うちにはやく革命側に立って、中央アジアの征服者クタイバ Qutayba b. Muslim の子にあたるウマイヤ朝のバ

スラ総督サルム Salm と戦つゝ、一族のラウフ Rawh b. Hātim b. Qabisa、ヤズィード Yazid 兄弟とともにワースト包囲に参加した。^②ムハッラブ家配下のアズド族が新政府軍に編入されたのはもちろん、いったん父の故郷ライ Rayy に戻ったサルムもイラクに帰り、バスラのムダル Mudar 系のアラブを指揮するようになった。^③

また、イラクに駐留していたジャズィーラのシャイバーン Shaybān 族の指揮官マフン Ma'n b. Zaidā は最後まで革命軍に抵抗して、ウマイヤ朝のイラク総督イブン・フバイラ Yūsuf b. 'Umar b. Hubayra とともにワーストに籠城したが、^④ラーワンデイーヤを討つてマンスールの信任を得、以後ジャズィーラ軍を率いて重用されるようになった(フバイラは処刑された)。スマイサートに籠城したイスハークや、アブドゥラーを支持してアブー・ムスリムと戦ったズファール Zufar b. 'Āsim、ジャファール Jafar b. Hanḡala al-Bahrānī らも許されたように、シリアとジャズィーラのアラブの多くは正規兵としてとどまり、サーイファ sāifa (夏のビザンツ遠征)を行いつづけた。シリアにとどまった軍は、アブドゥラーの敗戦後、エジプトから移つて来てマルワーンの未亡人と結婚したサーリフの指揮下に入り、かれが一五二(七六九)年に死ぬと、指揮権は子ファドル Fadl とアブドゥル・マリク 'Abd al-Malik に継承された。^⑤

革命軍に抵抗しなかったモースル Mawsil とエジプトの兵も従来の地位を守った。このように、多少極論すれば、ウマイヤ朝とアッバース朝の軍の違いは、前者がシリア軍、後者がイラクに移ったホラーサーン軍を王朝の権力の基盤としたところだけといつてよい。

革命軍の大半は一四五(七六二)年から建設されはじめたバグダードの円城 Mudawwara の郊外、とくに北部のハルビーヤ Harbiya にカティーアを与えられて住んだが、^⑥かなり多くはイフリーキヤに移り、またモースル、ラーフィカ Raḡqa、スグール Thughūr (ゴザンツとの辺境)にも駐留した。

マンスールは一四一(七五八)年ホラーサーン総督アブドゥル・ジャッバールの乱に対し、革命軍の大きな部分の子マフディー Muḡammad al-Mahdī の名目的な指揮下に派遣し、実際の指揮をハーズィム Khazim b. Khuzayma(表1の8)

に委ねた。^② この軍は反乱鎮圧後もライに駐留した。おそらくアリー 'Alī b. 'Iṣā b. Māhān (表1の37)はこのとき革命以来指揮下にある兵を率いて、ホラーサーンからライに来て、この軍に入ったと思われる。かれの父はナズィールの一人で、カフタバ遠征軍に入っていたが、ジャブラクの戦いのあと、敗将アーミルの首をもってアブー・ムスリムのもとに戻り、そのまま拘禁された。^③ この父は遠征軍将士の大半と同様、カリフ権力を支持してアブー・ムスリムと対立したため、処刑された。アリーは父の遺志を継いで、ホラーサーンの王侯土豪と対立し、大内乱のきっかけをつくることは後述する。マフディーは一五一(七六九)年この巨大な軍を率いてバグダードに帰り、ティグリス川東岸のルサーファ Rusfa 地区にカティーアを与え、自らも宮殿を構えて住んだ。^④

また、一四七(七六四)年のハザル Khazar 族のアルメニア、アゼルバイジャン侵入に対し、マンスールはホラーサーン軍のほか、ジャズィーラ、イラク、シリアから兵を送り、アルメニアの辺境に多くの砦を築いたほか、一五五(七七二年)ラッカ Raqa の隣にラーフィカを築いてかれらの軍営都市とした。^⑤

革命軍のうちバグダードのティグリス東西兩岸に住みついたものは、マフディーのころには第二世代に入り、革命の功を誇ってアブナー abnā' al-dawla (革命の子)と称するようになった。^⑥ そのころのアブナーの指導者は、マフディーのカリフ就任を助けたアリーとアブー・ハリッドの子ムハンマドであり、前者はルサーファ、後者はハルビーヤの指導者であった。また、ジャズィーラ軍を率いたマアンの死後、その兵はおいヤズィード Yazīd b. Mazayad が指揮し、アブナーに次ぐ重要な役割を果たすようになった。

① 拙稿「アッバース朝革命とホラーサーン」『オリエンタ』第二六巻一号、一九八三年。これは革命についての最近のこの研究を批判したものである。M. Shaban, *The 'Abbāsid revolution*, Cambridge, 1970; F. Omar, *The 'Abbāsid caliphate 132/750-170/786*, Baghdad, 1969; E. L. Daniel, *The political and social history of Khurāsān*

under 'Abbāsid rule 747-820, Chicago, 1979.

② al-Ṭabarī, *Ta'rīkh al-rusul wa'l-mulūk*, ed. M. J. de Goeje, Leiden, 1879-1901, series III, pp. 2-9; anonymous, *Abkhār 'Abbās wa wuḍū'ihī*, ed. 'Abd al-'Azīz al-Dūrī, Beirut, 1972, pp. 339-54; al-Balādhurī, *Anṣab al-aṣhrāf*, ed. 'Abd al-'Azīz al-Dūrī, Beirut,

- 1978~, Vol. 3, pp. 136-7: Ibn A'tham al-Kūfi, *Kitāb al-futūḥ*, ed. 'Abd al-Wahhāb al-Bukhārī, Hyderabad, 1968-75, Vol. 8, pp. 172-4: al-Azdī, *Ta'rikh al-Mawṣil*, ed. 'Alī Ḥabiba, Cairo, 1967, pp. 116-7: al-Ya'qūbī, *Ta'rikh*, Beirut, 1960, Vol. 2, p. 343.
- ㊦ Ṭabarī, *op. cit.*, III pp. 9-10: Ya'qūbī, *op. cit.*, p. 353.
- ㊧ Ṭabarī, *op. cit.*, III pp. 10-19: Balādhuri, *op. cit.*, pp. 137-8: Ya'qūbī, *op. cit.*, pp. 344-5.
- ㊨ Ṭabarī, *op. cit.*, III pp. 23-37: Balādhuri, *op. cit.*, pp. 139-143: Ya'qūbī, *op. cit.*, pp. 418-20.
- ㊩ Ṭabarī, *op. cit.*, III pp. 20-21: Balādhuri, *op. cit.*, p. 138.
- ㊪ Ṭabarī, *op. cit.*, III pp. 38-51: Azdī, *op. cit.*, pp. 125-137: Ya'qūbī, *op. cit.*, p. 346.
- ㊫ Ṭabarī, *op. cit.*, III pp. 56-8: Ya'qūbī, *op. cit.*, pp. 354-5.
- ㊬ Ṭabarī, *op. cit.*, III pp. 84-91: Balādhuri, *op. cit.*, pp. 184-90: Ya'qūbī, *op. cit.*, pp. 361, 364.
- ㊭ Ṭabarī, *op. cit.*, III pp. 92-99: Balādhuri, *op. cit.*, pp. 105-8: Ya'qūbī, *op. cit.*, pp. 365-6.
- ㊮ Ṭabarī, *op. cit.*, III pp. 99-119: Balādhuri, *op. cit.*, pp. 201-11: Ya'qūbī, *op. cit.*, pp. 366-8.
- ㊯ Ṭabarī, *op. cit.*, II p. 1968: 'Abbās, p. 279.
- ㊰ Ṭabarī, *op. cit.*, III pp. 64-5: al-Ya'qūbī, *Kitāb al-buldān*, ed. M. J. de Goeje, Leiden, 1892, p. 285: C. E. Bosworth, *Sistān under the Arabs*, Rome, 1968, p. 78.
- ㊱ Ṭabarī, *op. cit.*, III pp. 118-9.
- ㊲ Ṭabarī, *op. cit.*, III p. 71.
- ㊳ Ṭabarī, *op. cit.*, III p. 74: Ibn 'Idhārī, *al-Bayān al-Mughrib*, ed. G. S. Colin and E. Lévi-Provençal, Beirut, 1980, Vol. 1, pp. 72-3: al-Balādhuri, *Futūḥ al-buldān*, ed. M. J. de Goeje, Leiden, 1866, pp. 232-4.
- ㊴ Ṭabarī, *op. cit.*, III p. 369.
- ㊵ *Ibid.*, p. 135. ねれの父せりタマへく 薩への指搦言なり (Ṭabarī, *op. cit.*, II p. 1241)°
- ㊶ *Ibid.*, pp. 356-7. ねれの父せりタマへく 薩への指搦言なり (Ṭabarī, *op. cit.*, II p. 1247)°
- ㊷ Ibn al-Athir, *al-Kāmil fī'l-ta'rikh*, ed. C. J. Tornberg, Beirut, 1965-66, Vol. 6, p. 39.
- ㊸ Ṭabarī, *op. cit.*, III pp. 18-9.
- ㊹ *Ibid.*, pp. 21-3; Balādhuri, *ansāb*, pp. 174-7.
- ㊺ Ṭabarī, *op. cit.*, III p. 305.
- ㊻ *Ibid.*, pp. 63-5: Balādhuri, *ansāb*, pp. 145-6.
- ㊼ Ṭabarī, *op. cit.*, III pp. 130-3: Balādhuri, *ansāb*, pp. 235-40.
- ㊽ Kennedy, *op. cit.*, pp. 74-5.
- ㊾ Ya'qūbī, *buldān*, pp. 24-50: J. Lassner, *The shaping of 'Abbāsīd rule*, Princeton, 1980, pp. 208-23.
- ㊿ Ṭabarī, *op. cit.*, III pp. 134-6: Balādhuri, *ansāb* pp. 227-30: Ya'qūbī, *Ta'rikh*, p. 371.
- ㊽ Balādhuri, *ansāb*, p. 137.
- ㊾ *Ibid.*, p. 169: Ṭabarī, *op. cit.*, III pp. 83-4.
- ㊿ Ṭabarī, *op. cit.*, III p. 364: Ya'qūbī, *buldān*, pp. 251-4.
- ㊽ A'tham, *op. cit.*, pp. 231-3: Ṭabarī, *op. cit.*, III pp. 318, 328, 353: Ya'qūbī, *Ta'rikh*, pp. 371-2.
- ㊿ Ṭabarī, *op. cit.*, pp. 372-3: Ya'qūbī, *op. cit.*, pp. 370-1: Shaban, *Islamic history: a new interpretation 2*, Cambridge, 1976, p. 15.
- ㊽ Ṭabarī, *op. cit.*, III p. 498: Shaban, *Islamic history 2*, p. 30:

二 ホラーサーン、中央アジアの王侯土豪と中央政府^①

ホラーサーンとマールワラーアン＝ナフル *Mā warā'l-Nahr* (本稿ではあわせて東方と呼ぶこともある) には革命時マリック *malik* (*pl. mulūk*) とよばれる小王侯とディフカーン *dihqān* (*pl. dahāqin*) という土豪、大地主が無数に存在していた。史料では両者の区別は明確ではないので、本稿では両者をあわせて王侯土豪と呼ぶことにする。王の称号は *shah*, *ikhshid*, *afshin*, *shir*, *kanārang*, *abrāz* (*barāz*), *barāz-bandeh*, *khudāt*, *khāqān*, *tarkhān* など、国によって違っていた。^② 宗教は都市を中心にゾロアスター教、マニ教、ネストリウス派キリスト教、仏教などがあったようだが、王が多く、臣民によって神として崇められていたことは、のちのウシュルーサーナ *Ushrusana* 王アフシーン *Afshin* の裁判での証言で明白である。王は大都市ではシルク・ロードの商人貴族、農村ではディフカーンの勢力にはばまれていたが、マルウのフリー *'Alī b. Hishām* はサマルカンドのウジャイフ *'Ujayf b. 'Anbasa* によって領内では専制的にふるまっていたと非難されている。^③ また、旧ササン朝領内の諸都市はもちろん王はいなかったが、マルズバーン *marzbān* やイスバフズ *Isfahbād* とよばれる土着性の強い辺境領主がいて、アラブが多数定着したマルウでさえ、ウマイヤ朝末期まで存在しつづけた。

これらの諸国、諸地域はアラブ征服時にアラブと条約を結び、毎年定額の貢納を払うかわりに、従来の政治、社会体制や宗教を維持することを認められた。^④ ただマルウだけはそれ以外にオアシスの諸村にアラブ兵士が分宿することを認めさせられ、五一(六七)年クーファとバスラの兵五万家族、一一二(七三)年同じくクーファとバスラの兵二万をほとんど受け入れた。革命時にはマルワッルーズ、バルフ、ブハーラー *Bukhara*、サマルカンドにもアラブの大軍が駐留し、前述の革命がおきた諸都市にも少数が駐留していた。その結果、ブハーラーとサマルカンドの王は本市をアラブに引き渡して、

それぞれ郊外の都市ワラフシャー Warakshā、イシュターハンジ Ishtākhanj に退去した。

しかし、農民はもとより、王侯土豪すらほとんどイスラームに改宗しておらず、いったん改宗しても、また反乱をおこして背教することが多かった。とくにバクトリア南方のヒンドウークシュ山地やソグド南方のキシュキシュ Kish、東方のウシユルサナ、フッタル Khutai のような山岳地域やバーズギース Bādhgis のような都市がない遊牧中心の地域、またフェルガーナ Ferghana、カシュガル Kashghar、シャーシュ Shash、タラス Tarās のような遠方の諸地域は事実上アラブから独立していた。これらの王侯土豪は数が少ないが、尚武な兵士と領民をもち、アラブがあなどれない軍勢力を有し、必要に応じて農民を徴兵したようである。

ただ、王侯土豪の中には熱心なムスリムになって革命運動に身を投じたものもいた。ナズィールのハーリド Khalid (表 1 の 10) の父バルマク Barmak はバルフ近くのナウバハール Nawbahār (Novā vihāra 新寺院) 僧院の管長 parmak であり、広大な寺領をもち、仏教領主というべき存在であったが、クタイバに征服された。同じくダーイーのムハンマド (表 1 の 11) の父スール・シは突厥系のグルガン王 chur であったが、クタイバのつぎのホラーサーン総督ヤズィード Yazid b. al-Muhallab に征服された。ナキープのルザイク Ruzayq b. Muṣab とフサイン Husayn (ターヒルの父) の兄弟はスィジスターン総督タルハ Talha al-Falḥāt の手でイスラームに改宗した。ラート近郊のブーシャング Būshang の王とみられる。ナキープのイーサー ʿIsā b. Aʿyan とアムル ʿAmr の兄弟も、かれらの兄弟ハルサー Hartama とバルマク家とのきわめて近い関係からみて、バルフの有力土豪に違いない。カフタバ遠征軍に加わって、のちホラーサーンに帰ったトゥラルルフダート Turākhdāt (表 1 の 29) もホラーサーンの土着の王侯と史料に明記されている。

さて、革命成功後、革命軍の大半がカフタバの指揮下に西に移ったため、アブー・ムスリムは王侯土豪の協力を求めざるを得なくなり、かれらの改宗を勧め、その軍を地方政府軍に編入しようとした。かれのメッカ巡礼に同行したティレク Tirek (Nēzak) はクタイバに滅ぼされたバーズギース王タルハーン・ティレク Tarkhān Tirek の一族だろう。また、途

中フルワーン *Hulwān* までかれの巡礼に同行し、かれの処刑直後に反乱をおこしたスンパーズ *Sunbādh* (*Sunfadh*) はナイサープール *Naysābūr* のアフン *Ahn* (*Ahrawāne*) のライース *rais* で *Firūz Isbābādh* とよばれ、有力土豪だったことは疑えない^⑩。ウマイヤ朝のホラーサーン総督ナスルと親しく、のちアブー・ムスリムに処刑されたブハーラー王 *Bukharākhudāt* クタイバ *Qutayba b. Tughshāda* ちえ革命軍に協力してブハーラーのアラブ駐留軍の反乱を抑えた。^⑪

アブー・ムスリムに将として仕えたムカンナアも、キシュ近くのサナム *Sanām* に中央アジア特有の城内に畑や森を含む大城砦をもち、その土豪だったに違いない^⑫。こうして、王侯土豪の勢力は革命後いっそう強まり、ホラーサーンに残留した革命軍やイラクから帰郷した革命軍の指揮官も土豪化し、かれらと歩調をあわせるものが多くなった。

アブー・ムスリムを処刑したマンスールは東方の農民から直接徴税する機構をもてなかつたので、王侯土豪を圧迫してかれらから金品をまきあげようとした。シュルタの長官としてカリフにもっとも忠実と思われた革命軍指揮官の一人アブドゥル・ジャッパール(表1の21)は一四〇(七五七)年ホラーサーン総督に任命され、はじめカリフの意を忠実に実行したが、やがてその不可能を悟り、カリフに反抗するようになった。王侯土豪の大乱に発展することを恐れたマンスールは、前述したようにマフディーとハーズィムの指揮下に大軍を派遣し、ハーズィムと密接な関係をもつマルワルーズの兵はムジャッシャルの指揮下に遠征軍にに応じてアブドゥル・ジャッパールを捕えることに成功した。^⑬

遠征軍はそのままライにとどまり、アブー・ムスリムのかわりにマフディーを首班とするホラーサーン自治政府が成立した。つまり、マンスールは王侯土豪を力で抑えるのではなく、かれらと妥協したのである。もちろん、マンスールはこれを過渡的な処置とし、一〇年後マフディーをその軍とともにバグダードに移したあと、バグダードのホラーサーン軍の指揮官をあいについてホラーサーン総督に任命し、しだいに王侯土豪を抑える政策を採った。^⑭

これに対し、王侯土豪はアブル・アッバースがマンスールの後継者に指名していた徒弟のイーサー *ʿIsā b. Mūsā b. ʿAlī* に期待を寄せた。イーサーは巡礼時アブー・ムスリムの親友であり、かれの命を守ろうとしたことからみて、革命

以前からかれの親友だったことは容易に想像される。^⑮ 王侯土豪がイーサーを支援したのは当然であり、これに対し、既得権を守るため中央集権化を強力に推進するバグダードのホラーサーン軍はマフディーを後継者にする運動を始めた。イーサーが一四七（七六四）年まで長期間マンスールと軍の圧力に屈さずにおれたのは王侯土豪の支援があったからで、一五三（七七〇）年にはもっとも強硬なイーサー派の土豪ハルサマとウルワーン Yusuf b. 'Ulwān が鎮につながれてバグダードに連行されてきた。^⑯

一五〇（七六七）年バーズギースでウスターズ・スィースが反乱をおこしたのはイーサーの継承権放棄に反発したからと史料に伝えられている。^⑰ スィースがその付近の土豪だったことは、マリクとかアミール al-ḥaḥī とかよばれていることである。ケネディはかれがアラブの影響を受けない独立君主であり、独立を守るためにアラブと戦ったと考えているが、むしろ、バルフに駐留していたアラブの指揮官アブー・アウンと友人だったように、ホラーサーンの地方政治に深く関与していたとみてよい。また、ダニエルは革命の結果支配階級になった都市のムスリムに反発した農民の反乱としているが、農民の一部が反乱に参加したとしても（その証拠はないが）、王が戦時に農民を徴兵するのは中央アジアではふつうのようである。農民反乱とする根拠にはならない。この反乱も相方の妥協で終り、スィースの兵は衣料が配給されるほど厚遇された。スィース自身もバグダードで処刑されたとするのはヤアクービーだけで、他の史料がかれの処置に沈黙していることはかれが許されたことを暗示している。^⑱

さらに、かれの娘マラージル Marajil はマームーン al-Ma'mūn を生み、子ガールィブ Ghālīb はマームーンに側近として仕えたという。^⑲ ダニエルはシュウビーヤ shu'ūbiya 運動のさい、アラブ文化擁護派がマームーンの親イラン的性格を強調するため、この話を捏造したとしているが、アッバース朝政権下でカリフをこのようなデマで中傷することは不可能であり、事実はその逆で、タバリこそ政府に気がねして故意にこの事実を記述しなかったのだろう。実は、はるか後世のペルシア語の年代記 Ghurar al-siyar はアブー・アウンがスィースを許したことを明記しているのである。^⑳

マフディーのカリフ就任後、一六〇(七七七)年バルム Yūsuf b. Ibrāhīm al-Barm が反乱をおこしたのもマフディーの政策(hal と sira)に反対したからといわれる。ヤアクービーはこの乱とムカンナアの乱を混同し、反乱がブハーラーでおこったとしている。事実はバルムはグーズガン Gūzgān の土豪であり、ファールヤブ Farayāb の土豪を副官とし、ブーシャングを攻めてその王ムスアブ Muṣṭab b. Zurayq (タールヒルの祖父)を追放し、バルフでは親カリフ派に転向したハルサマの兄弟を殺した。反乱はスィジスターンに残っていたマアンのおいヤズィードのジャズィーラ軍に倒された²⁰。

一方、キシュの土豪ムカンナアは兵を率いてマルウでアブー・ムスリムにもアブドウル・ジャッバルにも協力していたため、バグダードで投獄されていたが、マルウに帰ったあと、イスラームを棄教して自己を神格化する教えを説きはじめた。マルウでの布教は失敗したが、中央アジアでは臣民は王を神と崇めていたから、領国の臣民はこれを抵抗なく受け入れた。キシュ付近のスーバフ Subahh 村の領民がアラブの徴税吏を殺害したのを機に、一五九(七七六)年ムカンナアはマルウから脱出し、キシュに川や森や耕地もあるサナム城を築いて、キシュ、ナフシャブ Nakshab のディフカーンの娘を人質に集めた。同じころ、ブハーラーとサマルカンドではムバイヤダ al-Mubayyada (白服党)といわれる人々が蜂起し、ブハーラーでは、かつてアブー・ムスリムに殺されたナルシャフ Narshakh の土豪の未亡人らが指導してヌミジュカト Numijkat (Numinjakath)とナルシャフを占領し、ブハーラー王ブンヤート Bunyāt b. Tughshāda の支持を得ていた。よって、これらの反乱は王侯土豪に指導され、ディフカーンと一部の農民も参加したソグド人の独立戦争とみてよい。トルコ系遊牧民も救援の要請を受けて駆けつけ、サマルカンド本市は一時反乱軍の手に落ち、奪回後も長期間包囲された。ダニエルはこの反乱をも農民主導の乱としているが、政府軍がナルシャフを陥落させたあと、ブハーラーの農民の多くは政府軍のサナム攻撃に兵と労働力を提供し、投石器などを製作した。サナムは一六三(七八〇)年に陥落し、ムカンナアは自殺し、まもなくブハーラー王ブンヤートもワラフシャアの居城で処刑された²¹。

一方、反乱には同調しなかった王侯土豪の期待はかれらと同じ出身のバルマク家に集った。マフディーの二子、ハーデ

イー Musa al-Hadi とハールーン = アッ = ラシード Harūn al-Rashid の継承争いで、バルマク家がラシードの後見人だったことから、自然に王侯土豪がラシードを、今やアブナーと称するようになったバグダードのホラーサーン軍がハーデーを支援するようになった。元来バルマク家のハーリドは自らアブナーであり、イーサーを圧迫して継承権を放棄させる方向に働いたが、かれの子ヤフヤー Yahyā はアブナーに対抗する上、王侯土豪との結びつきを強めた。

一七〇(七八〇)年のクーデターでラシードがカリフに就任すると、バルマク家に全政務を委ねた。バルマク家は各地で徴税を強化したが、東方だけは王侯土豪の伝統的な特権を侵さず、ヤフヤーは一七八年子ファドル Fadl をホラーサーン総督に任命した。ファドルはバクトリアとマー = ワラーアン = ナフルに遠征し、王侯土豪の協力を得て兵を募集し、アッバースィーヤ 'Abbasiya 軍を組織し、うち二万人をカランビーヤ Karanbiya 軍の名でイラクに送った。この軍はアブナーに対抗するバルマク家の軍である。まもなくバルフの土豪ハルサマが大軍を率いてパレスティナ、エジプトの混乱を平定し、遠くイフリーキヤに遠征していることからみて、シャアバーンやケネディの推定どおり、この軍がアッバースィーヤであり、ハルサマがその指揮官になったとみてよい。その一部はイフリーキヤにとどまったようだが(アグラブの子イブラーヒーム Ibrahim が建てた新都アッバースィーヤはかれらの名にちなむかも知れない)、多くはハルサマとともに東方に帰り、ビザンツ遠征に参加した。

ところが、ラシード自身が王侯土豪を抑える方向に大きく政策を転換し、一七九(七九五)年ファドルを免職し、翌一八〇年いったんファドルの弟ジャアファル Ja'far をホラーサーン総督に任命したものの、二〇日後にはかれを解任し、まもなくバルマク家の猛反対をおしきってアブナーの最強硬派アリーを任命した。おそらくイラクではアブナーの方がアッバースィーヤより強力で、ラシードの地位を脅かしたからだろう。ただちにアリーは王侯土豪やアラブの大地主 mulūk, a'ālā, kubrā', ashraf, sāda, wujūh を厳しく圧迫して現金、馬、奴隸、衣服、じゃ香、宝石、金銀製品、武具などを押収し、ラシードのもとに送った。アッバース朝時代を通じて、東方から中央政府に税が送付されたのはアブドゥル = ジャッ

ハイルとアリーの総督時代の二回だけである。^③

これに対し、王侯土豪を代表して、ブーシャング王フサインやマルウのカヌーギルド Kanugird の土豪ヒシャーム Hisham b. Farrakhusraw はラシードやバルマク家とその周辺の王侯土豪出身の官僚、軍人にさかんに手紙を送り、アリーの解任を懇請しつつけた。^④ さらに、アビーワルド代官ウハイブ Abul-Khashb Wuhayb b. 'Abdillah al-Nasā'i が一八三(七九九)年に反乱をおこし、ナサ、ナイサーブルを占領し、一九〇(八〇六)年にはサマルカンドを中心としたソグドの王侯土豪がウマイヤ朝最後のホラーサーン総督ナスルの孫にあたるサマルカンド代官ラーフィー Rāfī b. al-Layth を奉じ、アリーの免職を要求して大乱をおこした。アリーは一八六年ウハイブの乱を抑えたが、ラーフィーの乱はブハーラー、シャーシュ、フェルガーナ、ウシュルーサナ、フッタル、バルフにも波及し、東方の王侯土豪の過半を結集するようになった。^⑤

ラシードはラーフィーの乱がおこる前から自分の死後アブナーと東方の王侯土豪の正面衝突がおきることを深く憂慮していた。王侯土豪はウスターズ・スィースの孫にあたるマームーンを、アブナーはアミーン al-Amin を支援していたからである。このため、ラシードは一八六(八〇二)年のメッカ巡礼時にカアバ神殿で聖なる契約を結び、アミーンを後継カリフにするかわりにマームーンをホラーサーン総督に任命し、自分の死後東方に対し非常時にアミーンを援助する軍事義務を課すだけで、その他については完全な自治を約束した。^⑥ しかも、この巡礼からイラクに帰った直後、かれはバルマク家を粛清し、アミーンが将来かれらに抑えられることを未然に防ぎ、同時にアブナーの不満を解消させようとした。^⑦

ラシードは拡大するラーフィーの乱に対して一九一(八〇七)年アリーを罷免し、親王侯土豪派のハルサマをホラーサーン総督に任命し、おそらくアッパースィーヤと思われる四千の軍とともに派遣した。このとき、アブナーの反発を恐れて、ハルサマの総督任命を極秘にした上で、遠征軍をアリーに対する援軍の形で派遣し、すきを見てアリーを捕えさせた。^⑧ この政策転換でブーシャング王フサインの子ターヒル Tahir などはハルサマに積極的に協力してサマルカンドを攻め、サ

マルカンド王ウジャィフは政府側に投降してきた。^⑧

さらに一九三(八〇八)年ラシードはアブナーの過半をアミーンとともにバグダードにとどめ、将来マームーンの指揮下に予定された残りのアブナーや中央政府軍を率いて、病身をおして自らマームーンとともに東方遠征に出発した。その目的はなお逡巡する王侯土豪を説得し、それでも抵抗するものを徹底的に壊滅するためであった。このことは、かれがブハーラー陥落時に捕えられて連行されてきたラーフィーの兄弟を、取り引き材料として生かしておくかわりに処刑したことで確認できる。しかし、ラシードは遠征途上トゥースで病死し、かれとともにあったアブナーは「メッカの誓約」を破ってバグダードに帰った。すでにマームーンとともにマルウに進んでいた一部のアブナーはそのままホラーサーンにとどまり、マームーンはアミーンをカリフとして認め、アミーンもかれをホラーサーン総督として認めた。^⑨

こうして「メッカの誓約」は実現されたかに見えたが、アブナーと王侯土豪の強硬派がそれぞれアミーンとマームーンを動かし、一九五(八一〇)年両者は内乱に入った。前者の指導者はアリー、後者の指導者はサラフス Sarakhs の王族で、バルマク家の勧めで異教のまま中央官界に入ったファドル Faḍl b. Saḥī b. Zādhānfarīkh とハサンの兄弟で、ターヒルが父の反対をおしてこれに積極的に応じた。他の王侯土豪もファドルに説得されて、かれらの「おい」マームーンに忠誠を誓ったが、カヌーギルドの土豪ヒシャームはマームーンがホラーサーンにとどまるかぎりはどこまでも支持するが、かれがバグダードに帰ることを生命にかけて阻止すると明言している。^⑩

今やラーフィーも戦う必要がなくなり、サマルカンド付近のサーマーン Samān の土豪アサド Asad b. Samānkhudāt の四人の子ヌーフ Nuḥ, アフマド Ahmad、ヤフヤー、イルヤース Ilyās の調停を受け入れてマームーンと和した。^⑪ 反乱軍の多くがマームーンの軍に編入されたことは、ラーフィーの兄弟ナスルがのちサーマッラーでシュルタの長官に任命されていることから明らかである。^⑫

ファドル、ハサン兄弟はターヒルのブーシャング軍を主力とする兵力三八〇〇または四千の遠征軍を西方に派遣した。^⑬

ターヒルはライでアリー指揮下のアブナーを破り、ハルサマの援軍（おそらくアッバースィヤ）とともにバグダードを包囲し、一年の包囲戦のあと一九八（八一三）年これを陥落させた。アミーンは中央とのつながりをもつ妥協的なハルサマに投降しようとしたが、途中これを察知したターヒルに捕えられて、ただちに処刑された^⑭。マルウからはファドルの弟ハサンが代理人としてイラクに派遣され、王侯士豪がマルウを中心として全カリフ帝国を支配する体制ができあがった。これに反対したハルサマはマルウに帰ってファドルに殺された^⑮。イラクではクーファのアブ・サラヤー Abū'l-Sarāya の乱やバグダードのアブナーの乱がおこり、とくにアブナーは頑強に抵抗した。このため、マームーンは大きく政策を転換してバグダード帰還を決意し、途中サラフスでウスターズ・イスの子ガリーブにファドルを暗殺させ、王侯士豪 *hukm* に手紙を送って説得し、アブナーに降伏の機会を与えるためにゆっくり西進し、二〇四（八一九）年バグダードに入った^⑯。

一方ではマームーンは王侯士豪の不満をそらすため、サーマーン四兄弟を各地の代官に任命し、ついでターヒルをホラーサーン総督に任命した^⑰。王侯士豪を抑えることができるのはかれの一族しかなく、ひきつづきかれの一族が総督に任命されつづけた。もちろん、税がイラクに送付されることは決してなく、逆にトルコ遊牧民の侵入に備えて大軍が駐留するホラーサーンに毎年、一三〇万ディナールが中央から送られるようになった^⑱。こうして、ラシードの構想とは違って、カリフの一族ではなく王侯士豪の一人を首班とする自治政府がホラーサーンに樹立された。

① 本章はとくに通説と違っている。通説は E. G. Browne, *A literary history of Persia*, Cambridge, 1966-9 及び G. H. Sadighi, *Les mouvements religieux iranien*, Paris, 1938 などによつて固定化され、最近ウエルの前掲書と同 “The nature of the Iranian revolts in the early Islamic period” *Islamic Culture* 48 (1974) pp. 1-9. などによって補強された。しかし、これと最近のイブン・ナッバーーン (*Isa-*

mic history, a new interpretation, 2 A. D. 750-1055, Cambridge, 1976) デニエール、ケネディが筆者とは同時に独立に研究し、本稿より不徹底だが、王侯士豪の権力とホラーサーン自治という点で割合似た論を述べた。本章の論がいかに通説と違っても、逆に定説化しつつあることである。

② Ibn Khurādhbīh, *Kitāb al-mamālīk wa'l-masālik*, ed. M. de

3: Mas'udi, *op. cit.*, Vol. 4, pp. 250-2: Ibn Khallikān, *op. cit.*, Vol. 1, pp. 336-7.

④ Tabari, *op. cit.*, III pp. 715-6, 719-24: Ya'qūbi, *Ta'rikh*, pp. 423-6.

⑤ Tabari, *op. cit.*, III p. 732: Ibn al-Athir, *op. cit.*, Vol 6, p. 209: Ya'qūbi, *Ta'rikh*, p. 436: Ibn Hāzīm, *Jamhara anasb al-'Arab*, ed. A. Härūn, Cairo, 1962, p. 184.

⑥ Tabari, *op. cit.*, III pp. 730-1, 733-7, 764-72.

⑦ Tabari, *op. cit.*, III pp. 771, 773-4: Ibn al-Athir, *op. cit.*, Vol. 6 pp. 229-30.

⑧ Nushahi, *op. cit.*, p. 76: Tabari, *op. cit.*, III p. 777: Ya'qūbi, *Ta'rikh*, p. 436: Ya'qūbi, *bulān*, p. 305. ナーヤーン家がサヤマカ

ハルハシヤーン Ya'qūt, *Mu'jam al-bulān*, Beirut, 1957, Vol. 3, pp. 172-3.

⑨ Ibn Hāzīm, *op. cit.*, p. 184.

⑩ Tabari, *op. cit.*, III p. 798: Ya'qūbi, *bulān*, p. 306.

⑪ Tabari, *op. cit.*, III pp. 918-20, 923-4, 927-9.

⑫ *Ibid.*, p. 975.

⑬ *Ibid.*, pp. 996-8.

⑭ *Ibid.*, pp. 1025-8: Ya'qūbi, *Ta'rikh*, pp. 451-2.

⑮ Ya'qūbi, *bulān*, pp. 306-7.

⑯ Tabari, *op. cit.*, pp. 1036-7.

⑰ *Ibid.*, 1042-3.

⑱ Ya'qūbi, *bulān*, p. 308: Tabari, *op. cit.*, III p. 1304.

三 マームーンとムウタスィムの軍に入った王侯土豪

バグダードのアミーン対して送られたターヒル(表3の1)遠征軍にはブーシャング軍のほか、少くともつぎの軍が参加していた。アフマド＝イブン＝ヒシャームのカヌーギルド軍・マームーニーのバースギース軍・アッバースのブハーラー軍・ダーウード＝スィヤーフとミカイルのホラズム軍・ヤブグのトルコ人・ヌアイム、アラール兄弟のトルコ人・その他のトルコ人。

ヒシャームの子アフマド(表3の5)がターヒルのシュルタ長官として参加していたことからみて、カヌーギルド軍がブーシャング軍につぐ兵力をもっていたようである。アフマドは隠健派で、数の上で優勢なアリー軍と真正面から戦おうとしたターヒルに強く反対し、マームーンにアミーンとの和を強く勧めた。^①ターヒルの先鋒としてライに派遣されたマームーニー Hasan b. 'Alī al-Ma'mūnī (表3の10)はその名 *nisba* のとおり、マームーンの手でイスラームに改宗したらし

く、バーズギースの軍を率いていたようである。かれはライの戦いのあとハルサマの指揮下に入り、アミーンの処刑にも反対した^②。また、ブハーラー王の子アッバース 'Abbas b. Bukhārākhudāt (表3の8) が率いるブハーラー軍はライの戦いのあとアフワース占領に派遣され、ダーウード=スィヤーフ Da'ūd Siyāh (表3の11) とミカイル Mikā'il (表3の13) が率いる七〇〇のホラズムの兵はライで敵将アリーを殺したと^④。ヤブグ (葉護 Yabghu) の子ハールーン Hārūn b. Jabghuwayh (表3の15) はクタイバに捕えられてダマスカスに送られた東トハリスターン Tukharistān の突厥のヤブグの一族なのか、アッバース朝時代に有力になったカルルク Kharlūkh (葛邏祿) 族のヤブグなのか不明だが、その兵は当然トルコ人と思われる。ヌアイム Nu'aym b. al-Waḍḍāh al-Azdi (表3の16) とアラ'Ala' の兄弟もトルコ人 Atrak を率いてバグダードを攻撃したが、かれらがアズド族か土着の王侯土豪か不明である。また、ラーフィーの乱にもシャージュ王が加担し、アトラークを率いてナサフ Nasaf の救援に駆けつけ、アリー側の軍を破っている^⑤。ただし、史料にもう一カ所登場する遠征軍のアトラークがどのトルコ人が不明である^⑥。

内乱に勝ったマームーンは兵力の不足に悩んだ。ウカイル族を中心としたジャズィーラのアラブはナスル Naṣr b. Sh-abath の指揮下に抵抗をつづけ、カイスーム Kaysum に籠城した。タールヒルはバグダードをマルウから来たファドルの弟ハサン (表3の20) に渡し、ブーシャング軍を率いてナスルと戦い、ホラーサーン総督に転任後は子アブドゥラーが軍の指揮権を継承した。アブドゥラーは一〇年後の二〇九 (八二四) 年ようやくカイスームを陥落させ、ついで同じ軍を率いてエジプトのアラブ軍の乱を平定し、アレクサンドリア al-Iskandariya を占領していたスペイン al-Andalus 出身者をクレタ島に退去させた^⑦。

アゼルバイジャンでは、バズ Badh の土豪バーバク Bābak がアゼルバイジャンとアッラーン Arrān の土豪と土着化したアラブの族長と結んで、支配領域を著しく広げていた^⑧。クーファのアブ=サラヤーの乱はハルサマとマームーニーらに抑えられたが、ハルビーヤを中心としたアブナーがハサンに抵抗をつづけた。これに対し、ファドルは援軍

ったホラーサーン, 中央アジアの王侯土豪

4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	没年
		○		○		○												B	207 230 236 253
○	○			○				○	○ ^e										216 ^e 223 ^e
								○										B B	
○								○	(○)										202 ^e 236
○ ○ ○	○			○ ○				○	○			○							210 214 236
	○	○			○			○	○ ^e									S B	223 ^e 226 ^e
								○										B B	
																○		B B S	263 253 247

表3 マームーンとムウタスィムの軍に入

	氏 名	出 身 地	1	2	3
1	Ṭāhir b. Ḥusayn b. Muṣ'ab	Būshang	○	○	
2	'Abdullāh b. Ṭāhir (1の子)	Būshang	○	○	
3	Ishāq b. Ibrāhīm b. Muṣ'ab	Būshang	○		
4	Muḥammad b. 'Abdillāh (2の子)	Būshang			
5	Aḥmad b. Hishām b. Farrākhusrāw	Kanūgird	○		
6	'Alī b. Hishām (5の兄弟)	Kanūgird			
7	Aḥmad b. al-Khalīl b. Hishām	Kanūgird			
8	'Abbās b. Bukhārākhudāt	Bukhārā	○		
9	Muḥammad b. Khālīd Bukhārākhudāt	Bukhārā			
10	Ḥasan b. 'Alī al-Ma'mūnī	Bādghis	○		○
11	Da'ūd Siyāh	Khwārizm	○		
12	Asad b. Da'ūd Siyāh (11の子)	Khwārizm			
13	Mikā'il	Khwārizm	○		
14	Shāh b. Mikāl (13の子?)	Khwārizm			
15	Hārūn b. Jabghuwayh	Ṭukhāristān	○		
16	Nu'aym b. al-Waḡḡāh al-Azdi	?	○		
17	Hārūn b. Nu'aym (16の子)	?			
18	'Alā' b. al-Waḡḡāh (16の兄弟)	?	○		
19	'Alī b. Abī Sa'id (Faḍl b. Sahl のいとこ)	Sarakhs?			○
20	Ḥasan b. Sahl (Faḍl の兄弟)	Sarakhs			
21	Ghassān b. 'Abbād b. Abī'l-Faraj	Sarakhs?			○
22	Ḥumayd b. 'Abd al-Ḥamīd b. Rub'i	Ṭūs			
23	Muḥammad b. Ḥumayd (22の子)	Ṭūs			
24	Abū Sa'id Muḥammad b. Yūsuf b. 'Abd al-Raḥmān al-Kabaḥ	Marw			
25	Da'ūd b. Bānijūr	Khuttal			
26	Ḥātim b. Da'ūd (25の子)	Khuttal			
27	'Abbās b. Hāshīm b. Bānijūr	Khuttal			
28	'Ujayf b. 'Anbasa	Ishtākhanj			
29	Shu'ayb b. 'Ujayf (28の子)	Ishtākhanj			
30	al-Afshīn Ḥaydar b. Kāwūs	Ushrūsana			
31	Ḥasan b. Ḥaydar (30の子)	Ushrūsana			
32	Faḍl b. Kāwūs (30の兄弟)	Ushrūsana			
33	Rāshīd b. Kāwūs (30の兄弟)	Ushrūsana			
34	Wājīn al-Ushrūsani	Ushrūsana			
35	Khāqān 'Urtūj (Artūg?)	Artūg?			
36	'Ubaydullāh b. Yahyā b. Khāqān	Artūg?			
37	Muzāḥīm b. Khāqān	Artūg?			
38	Ikhshīd Juff b. Yaltegin b. Fūrān b. Fūrī b. Khāqān	Ferghāna			
39	Ṭughj b. Juff (38の子)	Ferghāna			
40	Ṣūltegin	?			

4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	没年
								○		○							○	B B	266
																		B B	
								○	○ ^e ○ ○ ○ ^e										223 e 223 e

				○				○										S	230
							△	○										S	235 e
							○	○		○	○			○				S	248
								○							○			S	
																○		B	253
													○		○			B	254
															○				249
																	S		256

12. Afshin 指揮下にアゼルバイジャンの Bābak と戦った(220-2)。
13. Mu'tašim のビザンツ遠征に参加した(223)。e は処刑されたもの。
14. Ṭabaristān 王 Māzyār と戦った(224)。
15. Bughā al-Kabīr 指揮下にアラビア半島のアラブ遊牧民と戦った(230-2)。
16. アルメニア, グルジャの土豪, 諸部族と戦った(219-38)。
17. アゼルバイジャンのアラブの土豪 Muḥammad b. al-Ba'ith と戦った(234)。
18. Bughā al-Kabīr のビザンツ遠征に参加した(247)。
19. Mutawakkil の暗殺に参加した(247)。
20. Waṣīf のビザンツ遠征に参加した(248)。
21. シリアの Ḥimṣ 市民の反乱と戦った(250)。
22. バグダード, サーマッラー両軍の251年の内乱で, バグダード方はB サーマッラー方はS。
没年はヒジュラ暦による。 eはカリフによる処刑。

マームーンとムウタスィムの新軍団（余部）

	氏 名	出 身 地	1	2	3
41	Ṭabāyaghū b. Ṣūltegin (40の子)	?			
42	Ṣhār-i Bāmiyān Harthama	Bāmiyān			
43	Muḥammad b. Harthama (42の子)	Bāmiyān			
44	Abu'l-Sāj Dīvdād b. Divdasht	Ushrūsana			
45	Faql b. Qārin (Māzyār の兄弟)	Ṭabaristān			
46	‘Abbās b. Qārin (45の兄弟)	Ṭabaristān			
47	Marzbān b. Tūrgish	Ṣughd			
48	Yūsuf b. Maṣṣūr b. Yūsuf al-Barm	Gūzgān			
49	Tīrek (Nēzak)	Bādhghīs			
50	Mūsā b. Abī'l-‘Abbās	Shāsh			
51	Būzbāreh (Būmāde)	?			
52	Shāh b. Sahl	(Khurāsān)			
53	Sindī b. Bakhtāshe	?			
54	Muḥammad Kūteh	?			
55	‘Amr b. Arbakhā(?) al-Farghānī	Ferghāna			

トルコ人指揮官

a.	Ashinās				
b.	Mūsā b. Ashinās (aの子)				
c.	Ītākh al-Khazarī	Khazar			
d.	Bughā al-Kabīr	Khazar?			
e.	Mūsā b. Bughā al-Kabīr (dの子)	Khazar?			
f.	Abū Naṣr Muḥammad b. Bughā (dの子)	Khazar?			
g.	Ḥabshūn b. Bughā (dの子)	Khazar?			
h.	Waṣīf al-Turkī				
i.	Bughā al-Sharābī (al-Ṣaghīr)				
j.	Ūtāmish Khaṭ Irkin (dのおい)				
k.	Bāyikbāk				

1. 195年の Ṭāhir 遠征軍に参加した。
2. バグダード陥落後、‘Uqayl 族の Naṣr b. Shabath 指揮下のジャズィーラのアラブと戦った (199-209)。
3. Kūfa の Abu'l-Sarāyā の乱と戦った (199-200)。
4. 内乱後、バグダードの Ḥarbiya 軍団の反乱と戦った (201-3)。
5. 減税を要求する Qumm 市民の反乱と戦った (210)。
6. エジプトのアラブ軍の反乱と戦った (210)。
7. エジプトの農民の反乱と戦った (213-4)。
8. アゼルバイジャンの Bābak の乱と戦った (213-4)。
9. Ma'mūn のビザンツ遠征に参加した (215-8)。
10. Jibāl の Muḥammara の乱と戦った (218)。
11. イラク南部の低湿地に住むインドからの移民 Zuṭt と戦った (206-19)。

として、革命時カフタバ遠征軍に加わったアブドゥル＝ハシード 'Abd al-Hamid b. Rubī (表1の26)の子でトゥースの土豪と化していたフマイド Humayd (表3の22)の兵、ヒシャームの子アリー 'Alī b. Hishām (表3の6)指揮下のカヌーギルドの兵、史料でファドルの母方のいとことされるアリー 'Alī b. Abī Sa'īd (表3の19)指揮下のサラフスの兵をホラーサーンから派遣した。^⑭

このことはファドルが内乱後も王侯土豪を説得してイラクに派遣していたことを示す。マームーンはバグダード帰還後、この政策をさらに拡大した。

バラズリーはこのことを明言している。

マームーンはカリフになると、背いていたソグド、フェルガーナ、ウシュルサナの住民に戦いを挑み、かれらがホラーサーンに居る間もその後も、かれらを攻撃しつづけた。かれらに騎兵を派遣したときは、手紙を送って、イスラームに改宗してかれの臣民になるように誘い、そう望むようにしむけた。^⑮

マームーンはホラーサーン総督に手紙を送り、まだかれに従わずイスラームに改宗していないマール＝ワラーアン＝ナフルの人々を攻撃させた。かれは使節を派遣して、希望者にディーワーンから給与を支給した。かれはこの地域の人々やかれらの王侯の好意を求め、特典を与えてかれらの欲心をひこうとした。かれらがかれの門をたたくと、かれはかれらを丁重に迎え、祝福した。^⑯

このうち、政府軍加入のようすが史料で確認できるのはウシュルサナ王アフシーン Afshin Daydar (表3の30)だけである。かれの祖父ハーラーフレ Kharrāhīre はバルマク家のファドルに恭順の意を示したことがあり、父カウス Kawūs はマルウにいたマームーンに貢納を約束した。かれは兄弟ファドル (表3の32)に王位継承権を奪われたため、一足早くイスラームに改宗してバグダードに移り、マームーンにウシュルサナ攻撃を勧めた。マームーンは二〇七(八二二)年マルウにいたときから官僚として仕えていたアブナーの指揮官アフマド Ahmad b. Abī Khalīd (アブー＝ハーリドの子)を軍とともに派遣し、カウスとファドルを屈伏させ、イスラームに改宗させてバグダードに移した。^⑰ まもなく王位に就いた

アフシーンはウシュルーサナ軍を率いて政府軍に入り、マームーン①の弟ムウタシム al-Mu'tasim の配下におかれ、その管轄地域内のバルカ Barga に駐留し、二一七(八三二)年にはエジプト農民の乱を平定した。^⑤

ワフシヤ Waksh とフッタルの王バーニジュール Banjūr の子ダーウード Dāūd (表3の25) は二〇六年バスラ総督に任命され、インド方面からイラク南部の湿地帯に移住してきたらしいズット Zutt (ジフシーの先祖か) と戦い、^⑥ 孫アッバース 'Abbas b. Hashim b. Banjūr (表3の27) は二一一年アブドゥラーに従ってエジプト代官として残された。^⑦ また、サマルカンド付近のイシュターハンジの王ウジャイフ (表3の28) は二一〇年カヌーギルドのアリーとともに減税を要求するクム Qum 市民の乱を討った。^⑧ かれらはアフシーンより少し先に政府軍に入つたらしい。

ヤアクビーの『諸国誌』にはバグダード建設時におけるカティアの配分が詳細に記されているが、その中に突然この時代のもと思われる記事が挿入されている。それによると、ハルビーヤ区はますます発展し、バルフ、マルウ、フッタル、ブハーラー、イスフイージャーブ Isfjab、イシュターハンジ、カーブル Kabul、ホラズムの兵は各々指揮官 qa'id と指揮者 ra'is がいたという。^⑨ これらの兵の多くはマームーンの新兵だろう。

マームーンは二二三(八二八)年子アッバース 'Abbas をジャズィーラと辺境 Thughūr wa 'Awāsim の総督に任命し、弟ムウタシムをシリアとエジプトの総督として、アフシーンらをその指揮下においた。^⑩ かれ自身子アッバースとともにウジャイフのイシュターハンジ軍、ヒシャームの子アフマドのカヌーギルド軍その他を率いて、二一五年から毎年ダマスカスを基地にビザンツ遠征に乗り出した。^⑪

一方、バーバクに対してはトゥースのアラブ土豪フマイドの子ムハンマド Muḥammad b. Humayd (表3の23) が集めた軍が敗退したあと、二一四年ターヒルの子アブドゥラーをジバルとアゼルバイジャンの総督に任命し、ブーシャング軍をバーバクとの戦争に用いようとした。しかし、このときホラーサーン総督が死んだので、その兄弟にあたるアブドゥラーを急ぎホラーサーン総督に転任させ、かわりにヒシャームの子アリー (表3の6) をアゼルバイジャン総督に任命し

てかれのカヌーギルド軍をバーバク戦に充てた。^②ところが、アリーは二一六年突然陰謀の罪を問われ、ビザンツ遠征途上のマームーンのアダナ Adhana の軍営に連行され、おいのアフマド Ahmad b. al-Khalil の手で処刑された。^③王侯土豪は政府軍に入っても、たがいに功を競っており、アリーはおそらくバーバクと結んでアゼルバイジャンに自治国を建てようとしたのだろう。

一方、ブーシャング軍はターヒルのいここにあたるシュルタの長官イスハーク Ishāq b. Ibrāhīm b. Muṣ'ab の指揮下にバグダードにとどまり、マームーンのビザンツ遠征中イラクとイラン西部の治安を任された。^④かれが二三六(八五二)年に死ぬと、ブーシャング軍はホラーサーンから移ってきたアブドゥラーの子ムハンマドの指揮下におかれ、バグダードに駐留してひきつづきイラクの治安を担当した。^⑤シャアバーンの主張どおり、かれらは中央アジアの王侯の兵を意味するチャーカル chakar からシャークリーヤ Shākiriya とよばれるようになったが、サーマッラーの同名の軍とは関係ない。^⑥二一八(八三三)年マームーンがビザンツ遠征途上タルスス Tarsus で死ぬと、子アッバースにおいて、アフシーンの上官にあたるムウタスィムを後継者に指名した。ムウタスィムはただちにビザンツ遠征を中止してバグダードに帰り、ジバル農民のムハンマラ Muḥammara とよばれる人々の乱にはイスハークのブーシャング軍、^⑦イラク南部湿地帯のズットにはウジャイフのイシュターハンジ軍とヌアイムの子ハールーン Harūn b. Nu'aym (表3の17)指揮下のトルコ人を派遣し、アルメニア人の反抗に対してはマームーンの末期に派遣されていたマームーニーのバーズギース軍をとどめ、^⑧その他の新軍団の大半(表3参照)をアフシーンの指揮下においてバーバクを一気に滅した。^⑨この戦いへの参加が確認されるのは、クーフバーニーヤ Kūhbanīya (山の民)とよばれるアフシーンとファドル兄弟のウシュルサナ軍、アブツィサーシ Abū'l-Sāj Divdād b. Divdasht Ḥashimī al-Ushshūr al-Sana'ī アフマド Ahmad b. al-Khalil のカヌーギルド軍、ブハーラーフダートのブハーラー軍、ダーウード・スィヤーフのホラズム軍、ハサンのシュルタ長官とファドル(81頁参照)の一族の兄弟の一人 aḥmad al-akhawayn quraba al-Faḍl b. Saḥl に率いられたサラフス軍、フマイドの将であ

ったアブー＝サイード Abū Sa'īd Muhammad b. Yūsuf al-Kabāh (表2の24) 指揮下のフマイド軍、ジバールのカラジ Karaj のアラブのイシクル 'Iṣṣī 族の土豪アブー＝ムッラフ Abū Dulaf Qasim b. 'Isā の軍、それに、後述する大ブガ Bughā al-Kabir 指揮下のトルコ人とバシール Bashir al-Turki 指揮下のフルガーナ人(ファラーギナ Farāghina) などであり、アブナーとジャズイーラ軍、志願兵も参加した。

バーバク戦争の間、ビザンツ皇帝テオフィロス Theophilus が辺境のズィントラ Zibatra' マラティヤ Malatya に侵入したのに対し、バーバクの滅亡後ただちにムウタシムはアフシーン、アシナース Ashinas の二人を主将として、新軍団の大半を自ら率いてビザンツを攻め、アンカラ Ancyra' アモリウム Amorium を陥落させた(二三〔八三八〕年)。ところが、この遠征からの帰途、ムウタシム、アフシーン、アシナースの三人を暗殺してアッバースをカリフに擁立する陰謀が発覚し、それに参画したウジャイフ、ハリールの子アフマド、それに後述するアムル 'Amr al-Farghānī らは処刑された。^⑤

凱旋直後、アフシーンは宝石をちりばめられた黄金の王冠 tāj, ikli' と二重ベルト washshahayn を授けられたが、官職はスィンド Sind 総督のみにとどまった。^⑥ かれはターヒル家を駆逐してホラーサーン総督の地位をねらい、ターヒル家の管轄下にあるタバリストーン Tabaristān の王マーズヤール Mazyār b. Qarin と結んで、かれをアブドゥラーに反抗させた。マーズヤールはホラーサーンから派遣されたターヒル家の軍とイラクから派遣されたアブッ＝サージュの軍によって捕えられた。アフシーンの陰謀は麾下の指揮官ワージン Wājīn al-Ushrusānī によってカリフのハージブ ḥājib (侍従) イーターフ Itakh に密告され、かれの裁判でマーズヤール自身がかれとの通牒を証言したため、かれは有罪が確定し、処刑された。^⑦

一方では、ムウタシムは母がソグド人であり、おそらくソグドの王侯の娘だったこともあって東方と関係が深く、さらに王侯土豪の政府軍加入を勧め、東方で兵を募集した。バラズグリーはそれをこう述べている。^⑧

ムウタスィムはカリフになるとマームーンの政策を継承した結果、かれの軍の大半がマームラーアン・ナフル、すなわちソグド、フェルガーナ、ウシュルーサナ、シャールシユ、その他の地方の出身者になった。かれらの王はかれのもとを訪れた。

ムウタスィムは王侯土豪や東方の人々が政府軍に入りやすいように、かれらと市民やアブナーとの殺しあいが起きていたバグダードを離れ、二二一(八三六)年ティグリス川上流のサーマッラー Samarra に新都を築いて、新軍団や官僚にカティアを与えた。^④バグダードにはすでに述べたイスハーク指揮下のブーシャング軍が残された。

ムウタスィムの求めに応じて政府軍に入り、サーマッラーに移った(あるいは強制連行された)王侯土豪で確認できるものを列挙する。

ハーカーン = アルトゥグ Khāqān 'Urtuğ (Artuğ) (表 3635)。かれのちのカラハン朝の祖サトゥク・ブグラ・ハーン Satuq Bughra Khān が埋葬されたカシュガルの近くのアルトゥグの王かも知れない。^⑤この地方がアラブと接触していたことは、マンスールの治世末期タラス代官ライス Layth がフェルガーナを攻め、カシュガルの王に貢納させたこと^⑥でわかる。マフディーのときにもサーマーン家のアフマド Ahmad b. Asad b. Sāmān がフェルガーナを攻め、王都カーサーン Kāsān に至った。^⑦ハーカーンがムウタスィムに歓迎され、その有力な支持者になったことは、かれがカリフのためにサーマッラー中心部に壮大なジャウサク Jawsaq al-Khāqāni 宮殿を建て、その付近にかれとかれの兵のために広大なカティアを与えられたこと^⑧でわかる。かれの子ファトフ Fath はムウタスィムの子ムタワッキル al-Mutawakkil の親友となり、別な子ヤフヤー、ヤフヤーの子ウバイドゥッラー 'Ubaydullāh b. Yahya は官僚としてムタワッキルに重用された。

フェルガーナ王イフシード = ジェッフ Ikshid Juff b. Yategin b. Fūrān b. Fūrī b. Khāqān (表 3636)。かれは勇敢な戦士で、多くの貴族とともにムウタスィムの求めに応じてサーマッラーに移り、大歓迎を受けてカティアを与えられ、二四七(八六一)年に死んだ。^⑨かれの子トゥグジュ Tughj はシリヤに移ってトゥールーン Tulun 朝に仕え、孫ムハ

マンドはエジプトにイフシード朝を開く。

フェルガーナのアムル 'Amr b. Arbakhā al-Farghānī (表3の55)。かれがファラーギナとよばれる兵の重要な部分の指揮官だったことは確かで、フェルガーナの王侯が貴族であることはウジャイフやアフマドと対等に交際していることわかる。^④

スールテギン Sutegin (表3の40)。どこの王か不明。かれは二二(八三六)年多くの部下とともに鎖につながれてサーマッラーに強制連行されたが、まもなくダマスクス総督に任命され、代官を派遣した。^⑤かれの子タバグ Tabayaghī は二五六(八七〇)年カリフ、ムフタデー al-Muhtadī の命で、給料の支払いを要求して暴動をおこしたトルコ人と戦った。^⑥バーミヤーン王 Sharī-Bamīyān ハルサー Harthama (表3の42)。バーミヤーン王は早くマンスールのときにイスラームに改宗し、その娘とかれのイスラームの導士との間に生れたハサンはバルマク家のフアドルに協力してカーブル Kābul 地方の征服に功をあげ、王位を与えられた。^⑦ハサンとの血縁関係は不明だが、ハルサマはサーマッラーに移り、トルコ人のイーターフの指揮下に配属され、二二九(八四四)年ヤマン Yaman にかれの代官として派遣され、二三三(八四八)年には前宰相イブヌッ=ザイヤート Ibn al-Zayyāt の財産を差し押えるためにその邸に派遣された。^⑧二五一年のサーマッラー軍のバグダード包囲でサーマッラーに残留した軍の指揮官スィマー Sima al-Sharbamīyānī はそのニスバからみてバーミヤーン王の指揮官らしい。^⑨

ウシュルーサナの王族アブッ=サージュ (表3の44)。かれは一族のアフシンについて政府軍に入ったらしい。かれは二四二(八五六)年以後メッカへの巡礼路の警備を任され、二五一年内乱の後も各地の総督になり、子ムハンマドはアゼルバイジャンに自治国を建て、アフシンというウシュルーサナ王の称号をとった。

タバリスターン王マーズヤールの兄弟フアドル (表3の45)。かれは二四六年ビザンツ遠征で活躍し、^⑩二四八年ヒムス Hims 市民の乱を討って総督となり、二五〇年市民の反乱で殺された。^⑪

ソグドの王の一人、マルズバーン al-Marzbān b. Turgish (表3の47)。かれはサマルカンドのある郊外の地区 rustaq の王で、ソグドの多くのディフカーンとともにイラクに招かれ、アフシーンの裁判でかれに不利な証言をした。かれは名からみてチュルギシュ Turgish 族かも知れない。

グーズガーンの土豪ユースフ Yūsuf b. Mansūr b. Yūsuf al-Barm (表3の48)。前述したように祖父はマフディーのときに反乱をおこし、父はマームーンのバグダード帰還に抗議して反乱をおこした。^⑧

バーズギース王ティレク Tirk (Nēzak) (表3の49)。かれは二六九(八八二)年カリフ・ムウタミド al-Mu'tamid がサーマラーから脱出してエジプト総督アブ・イム・Ahmad b. Tulun に頼ろうとしたとき、カリフに随行した。^⑨

シャーシュのムーサー Mūsā b. Abīl-'Abbas (表3の50)。かれはムウタスィムのとこエジプト総督になった。^⑩

その他、出自不明の王侯土豪は多い(表3参照)。

これらの王侯土豪のうち、アフシーンはサーマラー南端のマティーラ Maṭira に広大なカティーアを与えられたが、サーマラーをティグリス川にそって南北に縦断する大通り Shari' al-'Azam の両側にフタル王ハーンシム、ウジャイフ、マームーニー、ヌアイムの子ハールーンらがカティーアを与えられた。^⑪史料に明記されないものもカティーアを与えられたことは疑えない。

- ① Tabari, *op. cit.*, III pp. 799-800. エンヤームがカマーギルトの土 815-6. カルクのヤブグはラーフィーの要請で救援に駆けつけたこと
 給び給ふに Ya'qubī, *bulāṭn*, p. 279. があり、マームーンはフドルの助言を密れて、かれらの支配地を認
- ② Tabari, *op. cit.*, III pp. 778, 800, 852-4, 917-8. めつ和した。
- ③ *Ibid.*, pp. 852, 859.
- ④ *Ibid.*, pp. 800-1.
- ⑤ *Ibid.*, p. 1042.
- ⑥ Tabari, *op. cit.*, II pp. 1224-5. ⑧ Tabari, *op. cit.*, III p. 891.
- ⑦ Ya'qubī, *Ta'riḥ*, pp. 397, 435-6: Tabari, *op. cit.*, III pp. 775, ⑨ *Ibid.*, p. 712.
- ⑧ Tabari, *op. cit.*, III p. 891.
- ⑨ *Ibid.*, p. 712.
- ⑩ *Ibid.*, p. 799.
- ⑪ *Ibid.*, pp. 975-6, 1044-5, 1067-72: Ya'qubī, *Ta'riḥ*, p. 459.
- ⑫ Tabari, *op. cit.*, III pp. 1086-94: Ya'qubī, *Ta'riḥ*, p. 460-1.

- ③④ ヲ一々ムシツルヲ長條ニ結ニテ纏ムルヲ西セ。
- ③④ Ya'qūbī, *bulān*, p. 306. トハムニヤフホトノクニヨリテヤフホトノムニヤフ
Ibn Khallikān, *op. cit.*, Vol. 4, p. 41. Ibn al-Fiqāqā, *al-Fakhri*,
Beirut, 1966, p. 221.
- ③④ Balādhurī, *fuṭūḥ*, p. 430.
- ③④ *Ibid.*, p. 431.
- ③④ Tabarī, *op. cit.*, III p. 631.
- ③④ Balādhurī, *fuṭūḥ*, pp. 430-1: Tabarī, *op. cit.*, III pp. 1065-6:
Ya'qūbī, *Ta'riḥ*, p. 457: Shaban, *Islamic history 2*, pp. 50-1.
- ③④ Tabarī, *op. cit.*, III pp. 1105, 1106-7.
- ③④ *Ibid.*, pp. 104-5. ヤフホトノハヨリテヤフホトノムニヤフ Ya'qūbī, *bul-*
dān, p. 291: M. Forstner, *Al-Muṭazz bi'lḥā, Die Krise des 'abb-*
asidischen Kalifats im 3/9 Jahrhundert, Germersheim, 1976, pp.
138-41.
- ③④ Ya'qūbī, *Ta'riḥ*, pp. 460-1.
- ③④ Tabarī, *op. cit.*, III pp. 1092-3. ヤフホトノハヨリテヤフホトノムニヤフ
イブン・ヤフブī, *bulān*, p. 294: al-Isfahānī, *Kiṭāb al-masālik*
wa'l-manālik, ed. 'Abd al-Himī, Cairo, 1961, p. 181: Ibn Ḥawqal,
Sūrat al-ḥudūd, ed. J. H. Kramers, Leiden, 1938-9, p. 500: Yāqūt,
Ma'jam al-bulān, Beirut, 1957, Vol. 1, p. 196.
- ③④ Ya'qūbī, *bulān*, p. 248: Lassner, *op. cit.*, p. 213. ヲハムニヤフ
(*Islamic history 2*, pp. 11-2) ヤフホトノハヨリテヤフホトノムニヤフ
イブン・ヤフブī。
- ③④ Tabarī, *op. cit.*, III p. 1100.
- ③④ *Ibid.*, pp. 1102-3, 1104, 1109-12.
- ③④ *Ibid.*, pp. 1099, 1101: Azdi, *op. cit.*, pp. 373-4, 378-91: Niẓām
al-Mulk, *op. cit.*, p. 253.
- ③④ Tabarī, *op. cit.*, III pp. 1065, 1102: Ya'qūbī, *Ta'riḥ*, p. 463;
Ya'qūbī, *bulān*, p. 307.
- ③④ Tabarī, *op. cit.*, III pp. 1105, 1107-9: Ya'qūbī, *Ta'riḥ*, pp.
466-7.
- ③④ Tabarī, *op. cit.*, III p. 1102. ヤフホトノハヨリテヤフホトノムニヤフ
イブン・ヤフブī (*Ibid.*, p. 1062°)
- ③④ *Ibid.*, p. 1410.
- ③④ *Ibid.*, pp. 1385, 1510, 17, 1661-5: Shaban, *Islamic history 2*, pp.
64-5.
- ③④ Tabarī, *op. cit.*, III pp. 1165-6: Ya'qūbī, *Ta'riḥ*, p. 471.
- ③④ Tabarī, *op. cit.*, III pp. 1166-8.
- ③④ Ya'qūbī, *Ta'riḥ*, p. 464: Balādhurī, *fuṭūḥ*, p. 211.
- ③④ Tabarī, *op. cit.*, III pp. 1170-1228: Mas'ūdi, *op. cit.*, Vol. 4, pp.
352-4: Ya'qūbī, *Ta'riḥ*, pp. 473-4: Ibn A'ṭham, *op. cit.*, Vol. 8,
pp. 344-53.
- ③④ Tabarī, *op. cit.*, III pp. 1234-67: Mas'ūdi, *op. cit.*, Vol. 4, pp.
358-9: Ya'qūbī, *Ta'riḥ*, pp. 475-6.
- ③④ Tabarī, *op. cit.*, III p. 1233: Mas'ūdi, *op. cit.*, Vol. 4, p. 357:
E. Esin, "Tabarī's report on the warfare with the Türgis and
the testimony of eighth century Central Asian art," *Central*
Asiatic Journal 17 (1973), p. 137 note 20.
- ③④ Tabarī, *op. cit.*, III pp. 1268-70.
- ③④ *Ibid.*, pp. 1303-17.
- ③④ Mas'ūdi, *op. cit.*, Vol. 4, p. 344 note 2.
- ③④ Balādhurī, *fuṭūḥ*, p. 431.
- ③④ Tabarī, *op. cit.*, III pp. 1179-81: Mas'ūdi, *op. cit.*, Vol. 4, pp.
350-1: Ya'qūbī, *bulān*, p. 256.

- ③ *Hudūd al-'ālam*, tr. V. Minorsky, London, 1970, pp. 96, 281.
 ④ Ya'qūbi, *Ta'rikh*, p. 387.
 ⑤ *Ibid.*, p. 397.
 ⑥ Ya'qūbi, *buldān*, p. 256.
 ⑦ Ibn Khallikān, *op. cit.*, Vol. 5, p. 56.
 ⑧ Ṭabari, *op. cit.*, III pp. 1258-65.
 ⑨ *Ibid.*, p. 1194.
 ⑩ *Ibid.*, p. 1313.
 ⑪ *Ibid.*, pp. 1813, 1819-20.
 ⑫ Ya'qūbi, *buldān*, pp. 289, 290-1.
 ⑬ Ṭabari, *op. cit.*, III pp. 1335, 73.
 ⑭ Shaban, *Islamic history 2*, pp. 82-3.
 ⑮ Ṭabari, *op. cit.*, III p. 1436.
 ⑯ *Ibid.*, p. 1449.
 ⑰ *Ibid.*, pp. 1508, 33: Ya'qūbi, *Ta'rikh*, pp. 495-6.
 ⑱ Ṭabari, *op. cit.*, p. 181: Ibn Hawqal, *op. cit.*, pp. 499-500.
 ⑲ Ṭabari, *op. cit.*, III p. 1308.
 ⑳ *Ibid.*, pp. 1603, 1614: Ya'qūbi, *Ta'rikh*, p. 450.
 ㉑ Ṭabari, *op. cit.*, III p. 2037.
 ㉒ al-Maqrizi, *Khitāṭ*, Cairo, A. H. 1249, Vol. 2, p. 251.
 ㉓ Ya'qūbi, *buldān*, pp. 259-60.

四 トルコ人とフェルガーナ人

史料はイシュターハンジ人^①やウシュルサナ人のほか、フェルガーナ人 Faraghina とトルコ人 Atrak にしばしば言及している。ウシュルサニーヤがアフシーンとアブッサージュの兵、イシュターハンジーヤがウジャイフの兵であることは明らかだが、ファラーギナとアトラークは特定の王侯土豪の兵を指すのではなく、多くの王侯土豪、族長、貴族に率いられた多くの集団の総称のようである。一般にアラブはソグド以遠の住民、たとえばシャーシュ、イスフイージャーブ、ファアラープ、タラス、ホラズム、フェルガーナ、カシュガルなど辺境の住民をトルコ人かフェルガーナ人と呼んだし、^②トハリスターン、バーミヤーン、グルガーンの住民もトルコ人と呼ばれる可能性がある。よって、前章で述べたハーカンⅡアルトゥーク、イフシード、アムル、ダーウードⅡスィヤーフ、ムーサーはもちろん、ヤブグ、ヌアイム、バーミヤーン王らの兵もアトラークまたはファラーギナとよばれていると思われる。

これらの王侯土豪以外にもアトラークとファラーギナを指揮した指揮官が多く登場する。バーバク戦争でバズズを陥

落させたバシル Bashir al-Turki もフアラギナの指揮官だし、イエリシ Vermish b. Abi Ayyub^⑤、バイヌーク Baynūq^⑥、ダルグマーン Darghman^⑦、イスハーク Ishāq b. Thabit も Farghānī のニスブをもつ、フアラギナの指揮官だったらしい。かれらはおそらくイフシードと同じころ、村々から集めた兵を率いて政府軍に入った貴族だろう。

問題はトルコ人の指揮官である。ヤアクービーは『諸国誌』の中でジャファル Ja'far al-Khushshaki なる人物の証言を引用している^⑧。

ムウタスィムはマームーンの治世に私を毎年サマルカンドに送り、代官のスーフからトルコ人を買わせた。私は毎年多くのトルコ人を連れて帰り、マームーンの時代にムウタスィムが集めた数は三千にもなった。かれがカリフになると、トルコ人をいっそう求め、バグダードにいる他人の奴隷を買った。バグダードで買った多くのものの中には、Nu'aym b. Khazim Abi Harun b. Nu'aym のマムルークだったアシナース、Sallām b. al-Abrash のマムルークだったイーターフ、Nu'mān 家のマムルークで屠殺人だったワスィーン Wasīf, Dhul-rīṣatayn al-Faḍl b. Saḥl のマムルークだったスィヤー Simā al-Dimashqī がいる。

マスウディーもおそらくヤアクービーのこの記事を参照してこう述べている^⑨。

ムウタスィムはアトラークを集め、かれのマワリー (重臣) の手からアトラークを買いたいと思った。そして四千人が集った。タバリーもおそらくジャアファルの説に基づいてこう述べている^⑩。

一説によると、イーターフは Sallām al-Abrash のハザル人のグラーム ghulam で料理人だったが、ムウタスィムは一九九九年にかれ (イーターフ) をかれ (サッラーム) から買ったという。

また、のちにエジプトにトゥールーン朝を開くアフマドの父トゥールーン Tulūn について、サファディーはこう述べている^⑪。

かれの父はサーマーン家のスーフがマームーンに贈った奴隷、raqiq 中のマムルークである。アフマドの母の名は Hashim と云う。トゥールーンはトグズオグズ Tughuzghuz というトルコ人の種の出身である。

マクリーズィーも同様にこう述べている。^⑫

トゥールーンはブハーラー代官スーフが毎年マームーンに送る現金、奴隸、トルコ馬、その他の定まった貢納の一つとして送ったトグズオグズの出身者で、それは二〇〇年だ。

(アフマドは二二〇年サーマッラーで生れ、トゥールーンは二四〇年に死んだ。)

従来トルコ人指揮官が奴隸とされてきたのは一つにはこれらの記事にもよるが、ほとんどの場合エジプトのマムルーク朝からの安易な類推のためである。トルコ人は当然奴隸と考えられ、あたかもアッバース朝時代のトルコ兵がマムルーク *mamlūk* (pl. *mamlūk*) とよばれたかのように概説書や教科書にも記されている。ところが、タバリィはその非常に詳細な歴史の中で一度もトルコ人をマムルークと呼んでいないし、他の歴史家も同様である。ムウタスィムと同時代のジャーヒズはトルコ人をホラーサーン出身者とし、その勇氣と忠節を讃え、かれらを奴隸どころかアラブやマワーリィと対等に扱っている。^⑬ 史料をよく読めば、トルコ人が奴隸らしいようすがまったくない。先にあげた史料も最初の三つはすべてジャアファルの証言だけに基づくことは明らかだし、サファディーらはマムルーク朝時代の人で、かれらの時代の慣行から推定しているようである。また、ヤアクービーがジャアファルの証言を引用する仕方自体、読者にとって意外な報告であることを示しており、一般にはトルコ人が奴隸だとは思ひもよらないことだったとわかる。

一般にアラブ史料は嫌いな人物を奴隸や下層民の出身にこじつけるのが常套手段である。たとえば大土豪のバーバクは油の行商人と片目の洗濯女の子で羊飼ひ、王侯のムカンナアは片目の布さらしといったたぐいである。これらはアラブにとって最大の侮辱である。

バグダード市民はトルコ人と殺しあってサーマッラーに退去させ、しばしば反トルコ人の暴動をおこし、二五一年のバグダード包囲でもトルコ人にはげしく抵抗したほどで、トルコ人を極端に憎んでいる。これはトルコ人が異教徒でイスラームの敵というイメージが強いからである。実際、辺境のことは地理学者すら無知である。

反対にイブン・ハウカルはこう述べている。^⑭

ムウタスィムから兵の募集を委嘱されたヌーフは『ホラーサーンとマール・ワラーアン』ナフルには三〇万の村があり、各村から騎兵と歩兵を一人づつ出しても、支障はありません。』と答えた。そして、カリフたちはマール・ワラーアン・ナフルの住民、すなわちトルコ人が勇氣と忠節において誰よりもすぐれているから、かれらを招聘した。かれらのディフカーンがかれらの指揮官 *amir* であり、かれらがカリフの親衛隊 *shihna* のフラーギナとアトラークである。(抄訳)

これによれば、トルコ人は遊牧民も含まれるが、むしろ辺境の定着民の方が多かったようであり、かれらの貴族に率いられて政府軍に入っらしい。つまり、トルコ人とフェルガーナ人の募集は王侯土豪の招聘と同じであり、その延長といえる。実際、トルコ人指揮官が最初から高賄で高貴だった証拠が多く、王侯土豪と同様にマワリーとよばれ、かれらの兵も王侯土豪の兵と同様にギルマーン *ghilmān* (単数 *ghulam*) と呼ばれている。この証拠はジャアファルの証言に対して疑念をおこさせる。むしろジャアファルの証言が信用できないと思われる証拠が数多い。

以下にトルコ人指揮官を個別に検討することによってそれを例示したい。

アシナース *Asīnās* (表 *ce* の *a*)。ムウタスィムがカリフ就任後にかれを買ったというジャアファルの証言と逆に、かれはすでに二〇二(八一八)年ムウタスィムに仕えていた。このとき、ムウタスィムはマームーンに反抗してアブナーの乱に加わり、付近のアラブの反乱を討ち、かれのトルコ人ギルマーンの一人アシナースにアラブの槍から守られた。^⑮ アシナースは二一五年のマームーンの子ザンツ遠征では指揮官の一人であり、^⑯ サーマッラーでは北部のカルフ *Karḥ* 区に部下のために広大なカテイーアを与えられ、^⑰ のちハーカーンの子ファトフに与えられる大邸宅を築いた。^⑱ 二三年のムウタスィムのビザンツ遠征ではアフシーンと対等の司令官であり、翌年にはかれの娘 (*Atarja*, *Atarja*) はムウタスィムと市民の祝福の中でウマリー宮 *al-Qasr al-Umari* でアフシーンの子ハサンと結婚式をあげた。^⑲ さらにかれはアフシーンと同様な王冠とワシャー・ハインを二二五年ムウタスィムから、一二二八年にはその子ワーシク *al-Wāḥiq* から再び授けられた。^⑳

以上から、かれはトルコ人の王族だと考えられる。

イーターフ Itakh (ハザル族) (表3のc)。かれは二二三年のビザンツ遠征で一軍を指揮し、二二五年ヤマン総督に任命され、さらにサーマツラーの警察を任せ、前述したようにバーミヤン王を配下において諸務を代行させた。このことはかれがバーミヤン王に劣らない高貴の出身だったことを示す。ワーシクはかれをホラーサーンに至る東方、アシナースをイフリーキヤに至る西方諸州の総督に任命してその治安維持を任せ、アシナースの死後その職務をイーターフに兼任させた^②。かれがカリフを傀儡化する意志がなかったことは、二二二(八四七)年ワーシクの死後、三人の官僚、一人の裁判官 qadi、同僚の軍人ワスィーフとともに後継者を決める会議に出席し、ワーシクの子ムフタディーが幼少でカリフの資格に欠けるとして、二五歳のカリフの弟ムタワツキルを擁立したこと^③でわかる。しかし、ムタワツキルは二二五年かれを謀殺した。

大ブガ Bughā al-Kabir (表3のd)。かれは二四八年九〇歳ほどで死んだから、ムウタスィム即位時には六〇歳ほどだった。かれは主将としてワーシクるときメッカを脅かしたアラブ遊牧民を討ち、ムタワツキルるときアルメニア人の大民族反乱を平定し、ビザンツに遠征した^④。かれは妻の姉妹がムタワツキルを生んだこと、また二四〇年アルメニア総督としてシャムクール Shamkur 市を再建し、イスラームに改宗して保護を求めてきたハザル族三〇〇家族を招いて定着させ、しかもグルジア語年代記 Kart'lis Ts'kovreba によればかれらがかれの部族民 *tomt'a mist'a* だということからみて、トルコ人貴族だったことは確かである。かれもカリフを傀儡化する意志がなかったことは、二四八(八六二)年ムンタスィル al-Muntasir の死後、同僚の軍人小ブガとウタミシュ U'tamish が二八歳のムスタイン al-Musta'in を推したのに対し、熟年で強力なムウタスィムの子を強く推したこと^⑤でわかる。

ワスィーフ Wasif (表3のh)。かれはサーマツラーでカルフ区北方のハイル Hayr に部下のために広大なカティアーアを与えられ、柵でまわりを囲み、ワーシクるときマティーラ区のアフシーンの邸宅を与えられて移り住み、かれの部下も

その周辺に移った。^③ かれはムンタシルのときビザンツ大遠征の司令官となり、ムスタインのとき、ウタミシュ、小ブガとならぶ最有力の指揮官だったが、他のトルコ人指揮官と対立し、二五一(八六五)年小ブガとともにムスタインを連れてバグダードに逃れ、ターヒル軍と協力して一年余り、サーマッラー軍のバグダード包囲に耐えた。かれはフェルガーナ王トゥグジを指揮下におき、かれの指揮権を継承した子サーリフ Salih はソグド王 Muhammad b. Türgish やウシルーサナ王アブッ＝サージュラを従えていたことからみて、やはりトルコ人貴族であろう。

小ブガ Bugha al-Sharabi (al-Saghir) (表3のi)。かれはワスリーフと行動を共にし、内乱後妥協してともにサーマッラーに帰ったあと、カリフ、ムウタズ al-Mutazz から王冠とワシャーハインが授けられた。^④ かれもトルコ人の王族であり、カルフ区のトルコ人と争って殺される最期まで、かれの五〇〇人のギルマーンに従われていた。^⑤

ウタミシュ Utamish Khat Irkin (表3のj)。かれはカルフ区に邸を構えており、アシナースの死後カルフ区のトルコ人の指導者となり、ムスタインの即位後しばらくは宰相 wazir として軍と官僚の両方を支配した。^⑥ イルキンとは突厥の比較的弱小な部族の首長のことであり、かれもトルコ人貴族だったようである。

バイクバク Bayikbak (表3のk)。かれもカルフ区に邸をもち、ウタミシュの死後カルフ区のトルコ人の指導者としてバグダード包囲の重要な指揮官になった。^⑦ カリフ、ムフタデー al-Muhtadi はかれを謀殺したが、かれの兄弟ダグタヤ Taghūdaya に攻め殺された。^⑧ かれもベグ beg という美称をもつから、トルコ人の族長であろう。

その他のトルコ人指揮官に bog, tarkhan, tegin, chür を名前に含む Tajabeg, Uluḡ Tarkhan, Tegin, Sawātegin, Kalkātegin, Asātegin, Kūtegin, Bilgāchūr, Anūchūr, Talmachūr, Kanuchūr, Arnatachūr, Yāchūr, Amachūr など、高貴な出身を思わせるものが多い。また、トゥールーンの子アフマドにはヤブグの子やフェルガーナ王トゥグジが仕えており、到底奴隸出身とは思えない。^⑨

以上から、トルコ人指揮官は、辺境のトルコ人の王侯貴族であり、定着民の場合は村々から兵を集め、游牧民の場合は部

族民を率いて政府軍に入ったと思われる。よって、一般兵士も大半は奴隸ではないと推測される。こうした推測からジャ
アフアルの証言が信用できないといえよう。

シャアバーンはアトラークがトルコ人でないと考えたが、アラブはイラン系の言語とトルコ語をよく識別しており、イ
ラン人とトルコ人を混同することはまずない。^{③④} それゆえにバグダード市民もイラン系の王侯士豪には寛大だったが、トル
コ人には敵対したのである。サーマッラーでは、トルコ人は一般市民からは隔離され、近くにカティーアを与えられたフェ
ルガーナ人としか交際を認められず、トルコ人の女が辺境から移されてかれらと結婚し、ディーワーン *diwān al-mawālī*
wa-l-ghimān に登録されて扶養手当を支給され、離婚は禁じられた。^{③⑤} よって、アトラークとはトルコ人にはかならず
すでにかれらの出身地のソズド以遠の地はかなりトルコ化が進んでいたと考えたい。^{③⑥}

① Tabari, *op. cit.*, III p. 1362: Ya'qūbī, *buldān*, p. 263.

② Tabari, *op. cit.*, III pp. 1362, 1501, 03, 04, 55, 1623, 87, 1810:

Ya'qūbī, *buldān*, pp. 259, 263: Mas'ūdi, *op. cit.*, Vol. 4, pp. 350, 352, Vol. 5 p. 38.

③ Ibn Hāwqal, *op. cit.*, p. 468.

④ Tabari, *op. cit.*, III pp. 1214-5.

⑤ *Ibid.*, pp. 1505, 1602-3.

⑥ *Ibid.*, p. 1553.

⑦ *Ibid.*, pp. 1562, 79, 95.

⑧ Ya'qūbī, *buldān*, pp. 255-6.

⑨ Mas'ūdi, *op. cit.*, Vol. 4, p. 350.

⑩ Tabari, *op. cit.*, p. 1383. キー・マナー・ジ・ナ・キ・ナ族のキナーン
ヤ・ガ・ビ (Ya'qūbī, *buldān*, p. 262)°

⑪ al-Safadi, *al-Wāfi bi'l-wafayāt*, ed. S. Dederling, Wiesbaden,
1962~, Vol. 6, p. 431. ア・マ・マ・マ族が二〇五年のキナーナ

マ・マ・マ・マ (Tabari, *op. cit.*, III p. 1044)°

⑫ Magrizi, *op. cit.*, Vol. 1, p. 313.

⑬ al-Jahiz, *Risāla fī manāqib al-Turk*, tr. H. Walker: Essay on
the exploits of the Turks, *Journal of the Royal Asiatic Society*,
1915, pp. 631-97.

⑭ Ibn Hāwqal, *op. cit.*, pp. 467-8.

⑮ Tabari, *op. cit.*, III p. 1017.

⑯ *Ibid.*, p. 1103.

⑰ Ya'qūbī, *buldān*, pp. 258-9: Mas'ūdi, *op. cit.*, Vol. 4, p. 352:
Balādhuri, *fuṭūḥ*, p. 297.

⑱ Ya'qūbī, *buldān*, p. 266.

⑲ Tabari, *op. cit.*, III pp. 1300-1: Mas'ūdi, *op. cit.*, Vol. 4, p. 133.

⑳ Tabari, *op. cit.*, III p. 1302.

㉑ *Ibid.*, p. 1330.

㉒ *Ibid.*, p. 1303.

おわりに

(一) その他の新軍団

(a) マガーリバ Maghāribah。反乱をおこしたり、一派にわかれて争っていたエジプトのアラブ軍の中で帰順したものが採用され、サーマッラーのティグリス河畔通りにカティーアを与えられた。かれらはカリフのみに直結する親衛隊になり、中心部の大通りにカティーアを与えられたかれらの指導者ラーシド Rashid やムバーラク Mubarak のように、アラブであるにもかかわらず、部族名や父祖の名をいっさい名乗らなかつた。かれらの中には、自由民 *hur* と対照されるマムルークとよばれる奴隷らしきものがあり、就任直後のカリフ、ムタワッキルによって売却され、残った自由民はトルコ人なみの給与を与えられるようになった。^④ただし、このマムルークは兵士ではないようである。

(b) バーバキヤー Babakiya。バーバクの兵は乱後、かれの子ライス Layth らの指揮下に政府軍に入り、ダマスクスにも駐留した。^④

(c) ジバル、アゼルバイジャン、アルメニア、グルジアの土豪。これらの地域には半独立的なアラブ、土着の土豪が数多く存在し、アミーンとマームーンの内乱の間は自然に自立した。^⑤乱後、ジバルのカラジュのアラブの土豪アブー・ドゥラフはその詩才によってマームーンの寵臣となり、ムウタスィムによってサーマッラー中央部に広大なカティーアを与えられた。グルジアの土豪ムハンマド Muhammad b. 'Attāb やアルメニアの土豪アリー 'Alī b. Yahyā al-Armani はマームーンが送ったアルメニア総督ハーリド Khalid (ヤズィード・イブン・マズヤドの子) に降伏し、後者の多くの兵はマームーンによってムウタスィムの指揮下におかれた。^⑥ムハンマドの兄弟アッタブ 'Attāb b. 'Attāb はのちサーマッラーで中央政府のシャーキリーヤ庁 *diwān jaysh al-shakiriya* 長官になり、ムタワッキルの暗殺後、シャーキリーヤ軍に対し父を暗殺したムンタスィルに忠誠を誓うように説得しており、同軍の指導者であったことはまちがいない。^⑦ま

た、バーバクの乱に加担したアゼルバイジャンのアラブ土豪バース Ba'ith 家もムタワツキルのときシャーキリーヤに編入された。^⑧

シャーキリーヤの大半はムタワツキルのとき、宰相ウバイドゥラー (ハーカーン・アルトゥグの孫) によってジバル、アゼルバイジャン、アルメニア、グルジア、シリアから集められた兵で、ムタワツキルの新軍団といえる。^⑨ シャーキリーヤはトルコ人やホラーサーンの王侯土豪の兵とは別のディーワーン *divān al-jund wa'l-shakiriya* から給与を与えられ、^⑩ トルコ人を抑える政策を採ったムタワツキルの権力の基盤となり、かれの暗殺後、その遺志をついだ子ムウタツズを支持して、トルコ人やマガーリバとはげしく対立した。

(二) まとめと展望

バグダードでアッバース朝の中央政府軍となつたホラーサーンの革命軍は東方の王侯土豪の勢力をそぐことに熱心で、カリフの中央集権化政策を支持した。これに対し、東方の王侯土豪はしばしば反乱をおこし、イスラームを棄教して独立を目指したり、カリフに政策を変更して東方に自治を与えることを要求したりした。かれらはマームーンを支持して、中央政府軍に支持されたアミーンを倒し、ホラーサーン自治を確かなものにしただけでなく、一時はかれらが帝国を支配する体制さえ構想された。一方、かれらの一部はマームーン、ついでムウタシムの招きに応じて、兵を率いてバグダード、ついでサーマッラーに移り、中央政府軍に入った。イスラームが浸透しつつあったソグド以遠の辺境の諸地方からも、定着民や遊牧民が土豪、貴族に率いられてサーマッラーに移って来た。トルコ人とフェルガーナ人の大半はかれらであり、奴隷ではない。

一方、バグダードにはアミーンを倒したターヒル軍やもとの革命軍の子孫がとどまり、サーマッラーのトルコ人、フェルガーナ人、マガーリバとの間で二五一年内戦に発展し、バグダードは包囲された。しかし、サーマッラー、バグダードの両軍はまもなく起きたザンジュ *Zanj* の乱^⑪ に対して、カリフ、ムウタミドの弟ムワッファク *al-Muwaffaq* の指揮下に

入り、これを契機に融合し、乱後バグダードに住むようになった。これに加わらなかったサーマッラー軍の大半はエジプト総督アフマド・イブン・トゥールーンの軍に加わり、サーマッラー軍は解消した。

- ① Mas'udi, *op. cit.*, Vol. 4, p. 350.
- ② Ya'qubi, *buldan*, pp. 261, 263; Tabari, *op. cit.*, III pp. 1374, 77, 1680, 96.
- ③ Tabari, *op. cit.*, III pp. 1369-70.
- ④ Ya'qubi, *Ta'rikh*, p. 496; Tabari, *op. cit.*, III pp. 1577, 81.
- ⑤ Ya'qubi, *Ta'rikh*, p. 445.
- ⑥ *Ibid.*, pp. 463-4.
- ⑦ Mas'udi, *op. cit.*, Vol. 5, p. 46; Tabari, *op. cit.*, III p. 1479.
- ⑧ Tabari, *op. cit.*, III p. 1389.
- ⑨ *Ibid.*, p. 1463; Shaban, *Islamic history* 2, p. 76.
- ⑩ Ya'qubi, *buldan*, p. 267.
- ⑪ 恩主純「サングハの説とマッスーム朝」『イスラム世界』5, 1966, pp. 12-30; 拙稿「サングハの説」『イスラム世界』81, 1981, pp. 19-35 参照。

(大蔵府立西蔵研究資料校校蔵)

)

and débouché. Ceci est déjà bien connu, mais il nous reste à préciser quel article était le plus important dans les exportations de l'Espagne vers l'Amérique et quel pays était le plus gros fournisseur de l'Amérique espagnole.

Pour la première question, les documents que j'ai pu utiliser, sont unanimes à placer les toiles (tissus de lin et de chanvre) au premier rang parmi les exportations textiles espagnoles, bien que les historiens japonais attachent généralement plus d'importance aux étoffes de laine.

Pour la seconde question, nos conclusions sont suivantes :

1) Dans la seconde moitié du XVI^e siècle, après la paix avec l'Espagne de 1559, la France, profitant de la décadence de la production et de l'exportation des toiles des Pays-Bas, augmenta sensiblement ses exportations des toiles vers l'Espagne et l'Amérique. Il est presque certain qu'au début du XVII^e siècle, à Séville et Cadix, points de départ pour l'Amérique, l'activité commerciale des français était plus intense que celle des anglais ou des hollandais.

2) Pendant la dépression du trafic hispano-américain de 1610 à 1660, à cause des hostilités entre l'Espagne et la France, et de la concurrence accrue des toiles flamandes, les exportations françaises vers l'Espagne et l'Amérique subit une diminution sérieuse, mais à partir de 1660, avec la nouvelle expansion du trafic hispano-américain, la France redevint le premier fournisseur des produits textiles de l'Amérique espagnole et tenait cette place au moins juspu' à la fin du XVII^e siècle.

The new armies of Ma'mūn and Mu'taṣim

by

Fukuzo Amabe

The armies of the early 'Abbāsids consisted of the revolutionary army from Khurāsān which brought the 'Abbāsids to the caliphate and of the ex-Umayyad armies. The Khurāsāni army itself consisted of many small corps under Arab or mawālī commanders who recruited them from their clans or relatives. Most of them were from Marw, Marwarrūdh, Abiward, Nasā, and Gurgān. Many highest leaders were Arab Khuzā'ites from the villages of Marw. After the successful revolution the larger part of the Khurāsāni army settled in Baghdād.

On the other hand Khurāsān and Mā warā' l-Nahr had many petty kings called maliks and big landlords called dihqāns. They paid annual tributes to the Arabs on the basis of the treaties they concluded with them at the time of the Arab conquest, and instead the Arabs did not interfere in their internal affairs. Some maliks and dihqāns converted to Islam and took part in the revolution, eg. the Barmakids of Balkh. After most of the revolutionary army moved to Iraq many maliks and dihqāns converted to Islam and cooperated with Abū Muslim at the latter's invitation. Thus the united states of the maliks and dihqāns came true with Abū Muslim at its head. The caliph Manṣūr, who planned the centralization and autocracy, eliminated Abū Muslim but incurred the revolts of his governor of Khurāsān, 'Abd al-Jabbār, and of maliks and dihqāns, Sunbādh of Naysābūr, Ustādhīs of Bādhghīs, and Muqanna' of Kish.

Against the caliphs' centralization policy the maliks and dihqāns supported the succession of 'Īsā b. Mūsā after Manṣūr. Then in Mahdī's caliphate the Barmakids became their representative in the central government, while the abnā' al-dawla, the former Khurāsāni army settled in Baghdād, supported the centralization. Rashīd first favored the pro-dihqāni policy of the Barmakids, but reversed the policy by appointing the hawk of the abnā', 'Alī b. 'Īsā b. Māhān, governor of Khurāsān and then annihilated the Barmakids in order to conciliate the abnā'. Against 'Alī the maliks of Mā warā' l-Nahr rebelled with Rāfi' b. al-Layth, Arab governor of Samarqand, at its head. Rashīd was forced to dismiss 'Alī and moreover he had promised the setting up of the autonomous state of Khurāsān after his death with one of his sons Ma'mūn at its head.

After Rashīd died on his way to Khurāsān to fight Rāfi 'the maliks and dihqāns rushed to support Ma'mūn in setting up this state. Their leader was Faḍl b. Sahl, king of Sarakhs. He dreamed of not only the autonomy but the Khurāsāni supremacy of the whole empire. He organized the expeditionary force composed of the maliks and dihqāns under the command of Ṭāhir b. al-Ḥusayn, king of Būshang. After this force destroyed the power of the abnā' it remained in Baghdād.

After Ma'mūn returned to Baghdād against Sahl's policy he continued to invite the maliks and dihqāns to Baghdād to be enlisted in the central government army on condition that they should convert to Islam. His brother Mu'taṣim, after succession, founded their canton-

ment in Sāmarrā, and thereby strenghened this policy. Afshin of Ush-rūsana and many other maliks were thus recruited. Furthermore Mu-‘taṣim recruited the Turks and the Ferghānis of the further lands beyond Sughd, both sedentary and nomad, under the command of their lords and nobles, through the hands of Nūḥ b. Asad, lord of Sāmān near Samarqand and then governor of Mā warā’ l-Nahr. These maliks and Turkish and Ferghāni lords were called mawālī and their soldiers ghilmān. The Turks were never called mamlūks and of course they were not slaves.